
トライアングル

廉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トライアングル

【Nコード】

N7705D

【作者名】

廉

【あらすじ】

あいつらと関わるとロクなことが起こらない。平穩無事な高校生活に突如としてやってきたありえないような日々。めちゃくちゃなんだけど、どこか憎めない彼らとの、寒いようで暖かい青春の日々が始まった。

第1章 再会

とにかくこの2人と関わるとロクなことが起こらなかった。

小学生のとき、彼らと帰った日に山からなぜか野生の熊が下りてきて、1歩間違えれば死んでいてもおかしくない状態に陥ったこともある。中学生のときは、修学旅行中3人でぎゃーぎゃーケンカしてしまい、誤って東京湾に沈みそうになった。そういえば、3丁目に住んでいる雷オヤジの家の夫婦喧嘩の仲裁に入ったはいいものの、結果的に夫婦とあの2人だけが無傷で私だけが擦り傷をこしらえたことも思い出した。

さらに、あの2人が学校中の人気者であることにもしっくりこない。2人とも容姿端麗で頭脳明晰、運動神経抜群だったため、まるでマンガか何かの世界のようにクラスの女子はかっこいいと騒いでいた。

私とはといえば・・・お世辞にも美人とは言えず、成績も良くない、運動は人並みにはできなかったがなんとなくどんくさくて失敗が多い。とりわけ、どこにでもいそうな普通の女だった。

だけど、高校からは違う。あの2人と一緒にいて初めて名前を覚えられる生活にももう飽きた。彼らとは違う高校に行って、充実した生活を送ろうと思っていた。

そう・・・高校2年生の春までは……………

「袖芽めゆ！起きなつて！」

肩を揺さぶられて私は深い闇から目を覚ました。見覚えのある風景、ここは体育館・・・？途端に現実（まじ）に引き戻された。そうだ、確か今日は入学式で、校長先生の話があまりにも長くてついうたた寝をしたんだつた。

「っていうか、これで入学式を終了しますって言った後になんで寝るかなあ。後ろで見て退屈はしなかつたけどね」

私、三枝袖芽は、声の主である倉咲薫を見上げた。高校生になつて初めて仲良くなつた友達である。いつもは長い髪をそのままにしているが、今日は入学式があるためか後ろで1つに縛っている。

気がつけば周りにいる人はまばらであつた。在校生もすでに各自退場した後らしい。

「うっそ！やばいじゃん！……あれ？なんで薫がここにいるの？」

「あんたがいないから迎えにきたんだよ！」

ほら行くよ、と薫に腕を引っ張られて私たちは新しいクラス、2年4組に向かつていく。2年生のクラス分けは、文系か理系のどちらを選ぶかで決まり、1年生の終わりにクラス分けテストを受けて最終的に決定する。噂によれば、2年4組は頭の良い文系の集まりだと聞くが、実際のテストで32点を取った私が4組にいるのだから何かの間違いであると思う。

「そっぴやさつきミッチーが言つてただけど、今日転校生が来るんだってさ」

「ふーん……珍しいね。女子？」

「ミッチーは男子だつて騒いでた。そしたらクラスの女子が期待しちゃつて、きつと今教室ざわついてんじゃないかな」

ミッチーこと向井深雪。彼女は1年生のときからとにかくカッコいい男子をチエックするのが趣味であるという。私も彼女の手帳を見たことがあるが、男子のありとあらゆる情報が書かれてあつた。ただ、いまだミッチーの満足するレベルに達する男子は現れてないらしい。

新しい教室前はなんとなくしんとしていた。

「薫、もしかしてホームルーム始まつてるかもしんない」

「……もう始まつてるみたいだよ」

薫は扉をがらがらと開けて一旦止まる。ちよつとお腹が痛くて、などといったような言い訳をしてそそくさと教室に入っていく。私

もそれに続いた。

窓際にいたのは1年生のときと同じ担任である足立先生だった。教師3年目のおっとり系美人で密かに男子に人気がある。私自身も言い訳するべきであるかどうか迷っていると、

「あー！！ 柚芽だ！ 同じクラスだったんだ」

「ほんとだ。いないから違うクラスだと思ってた」

その声には聞き覚えがあった。確か、今年の春休みに似たような声を聞いた。そう・・・忘れもしない、あの2人の声。

見ると教壇の前に見知った顔があった。

背の低いほうが佐々木翔太、高いほうが西村和樹。

たぶんそのときの私の顔は、とても形容し難いような、あえて言うならかなり嫌そうな、そんな顔をしていたと思う。それを察したのか佐々木は、

「うわー、予想通りの反応だなー」

「えつつつ！ なんで・・・？ なんで佐々とカズがここに・・・ええつつ？」

どつきりテレビなんじゃないかと本気で疑った。私が混乱していると、足立先生が場違いなくらいのほほんとした声でその場を治めた。

「三枝さんの友達だったのかな？ まあ懐かしい話は後にして、とりあえず席に着きましょう。佐々木君と西村君は自己紹介をしてください」

理解不能の状態のまま私は窓際から2列目の1番後ろの自分の席に座る。と同時に、ウチの高校の制服を着た佐々木が喋り始めた。

「今日からこのクラスにお世話になる佐々木翔太です！ すっげー友達欲しいから、俺のことシカトとかしないでくださいよー。超ナイーブですから。」

あっ、こっちの西村君現在彼女募集ちゅ・・・ぐえっ！

相変わらずだ。佐々木のボケに、西村の痛いツツコミ。突然の西村のチョップに周囲は大爆笑している。

「いつてー！」

「これ以上何か言ったら、今度は佐々の恥ずかしい過去をみんなの前で言うから」

爽やかに笑って言っているが、西村の場合、有限実行な気がして怖い。

「西村和樹です。俺も友達が欲しいので仲良くしてくれると嬉しいです。中学まで陸上をやっていたので高校でもできればやりたいと思います。よろしくお願いします」

佐々木と西村の存在は、すぐに学校中に知れ渡ることになった。

「4組の転校生、なんかかっこよくない？」

「私は佐々木君がいいなあ。すごく人懐っこいし、明るくて、一緒にいるだけで楽しくなりそう。顔も私好きだし」

「私西村君派。誰にでも優しいそうだし、笑顔が爽やか！ほんっとかっこいいよね」

「あーあ。4組が羨ましいよ」

そんなような会話を女子トイレの中で私は聞いた。なんだか後ろめたい気持ちになったのはなぜだろうか。

「ねえ、例の転校生君とはどういう関係なの？」

トイレから出てきた薫がこっそりと尋ねてくる。

「どうって言われても・・・別に小、中一緒だったただだよ」

「ほー幼なじみかあ。すごいね」

「や、そんなんじゃないって。腐れ縁っていうか、腐った縁みたいな」

後で思い返しても、腐った縁というのは実に適切な表現であったと思う。確かに口クなことなかった。彼らと一緒にいると運気が低迷するのかもしれない。

それにしても、なぜ2人は転校してきたのだろうか。県内トップ校の秀明高校に通っていたはずだ。

「柚芽」

その声に振り返ると、渦中の1人である西村が近づいてくる。

「びつくりした？俺たちが転校してきたこと」

「そりゃびつくりするって。なんで転校することになったの？」

率直に聞くと、相手は困ったように笑った。昔からのクセだ。西村は言いにくいことがあると困ったように笑って口元に手をやる。

「まあいろいろあつてさ、自主退学してきたんだ」

「佐々も？」

うんと彼は頷いた。これ以上はもう聞いてはいけないような気がした。

そのとき、西村は初めて私の隣にいた薫に気づいたらしい。

「あ・・ごめん。話してる最中だった？」

「ううん、大丈夫。友達の倉咲薫だよ」

「どうも」

薫はぺこりと頭を下げる。彼女は他の女子とは違って、外見で人を判断したりはしない。

「よろしく。袖芽がいつもお世話になっています」

「いや、まったくです」

「どういう意味よソレ」

これは、私に対してかなり失礼な会話ではないだろうか？

「なあ袖芽、スピード出し過ぎなんじゃない？けっこー急だぜ？」

「うるっさーい！ーじゃあ降りなよ、重い！」

後ろには、私の頭に腕を寄せ、立ち乗りしている佐々木の姿がある。傍から見れば、女である私が自転車をこいで、男の佐々木がその後ろに立ち乗りしている図である。

「はあ・・・なんで私がこんなめに・・」

「ほんとはカズに乗っけてつてもらおっかなーって思ってたんだけど、むこう部活見に行ってくるみたいでさ。まあーじゃん。俺らダチじゃん」

「だったら代わってよ。私か弱いんだから・・」

「ちよつ前前!!」

私の言葉と佐々木の警告が重なった。気づいたときにはすでに遅い。私たちは歩行者にぶつかりそうになる寸前で避けて、バランスを崩してそのまま倒れてしまった。

膝を豪快に擦りむいた。

「大丈夫か？」

傍にしゃがみこむ佐々木は無傷でけろりとしている。本当に私の運氣がなくなってしまうのかもしれない。

そのときはつとした。そういえば、ぶつかりそうになった歩行者は無事だろうか。

見ると、右手で額を押さええてうずくまっている男性がいる。

「あの、すみませんでした!大丈夫ですか!？」

「大丈夫じゃないよ。花瓶が割れたじゃないか!」

男性の傍には、欠けた青い色の30センチくらいの花瓶がある。

「大切な物なんだ。お前たち2人には弁償してもらうからな。俺の店でホストとしてタダ働きしてもらおう。そっちのお嬢さんには体で払ってもらおうかな」

「えええつ!!」

純粋な佐々木は素直に驚いていたが、私はひねくれているので自分の運勢を呪っていた。

本当に口クなこと起こらない。

第2章 2人乗りには気をつけて

本当になんでこんなことになってしまったのだろうか？

そもそも学校の帰り道でホストクラブで働く男と自転車に2人乗りした私たちがぶつかりそうになって、避けたはいいものの、男が驚いて持っていた花瓶を落としてしまったことからすべてが始まる。その花瓶というのがまた厄介だった。どうやら、店のお得意様からのプレゼントらしく、ちょうどホストクラブの近くにその人の家があるため、その男が取りに来るように頼まれたそうだった。

花瓶の相場は恐ろしくて聞けなかった。

私たちは、表通りに建つビルの2階に位置するホストクラブに案内された。中は数人の男性がいる他は誰もいなかった。私たちは、裏の事務所でしばらく待たされることになった。

少し時間を置くと、ようやく頭の中が整理されてきた。

「あのさ、佐々……ごめんなさい。こんなことになっちゃって……」

「ほんとだよな、^{ゆめ}柚芽のせいだ」

「……ごめん」

「嘘だって！本気にすんなよ！大丈夫、俺働いて弁償するから。なっ？」

そのとき、あの男が言っていた「体で払え」という言葉を思い出した。

「私……一晩いくらなんだろう……」

「何言ってるの！？そんなことしなくていいって！！つかするなっ！」

「だってそうでもしなきゃ、一生働かされることになるかもだし」

「俺のことはいいって。俺のせいなんだし。それより……」

佐々木が言いかけたとき、さっきの男とは違う、もっと茶髪で髪の毛の長い20代前半くらいの男が事務所に入ってきた。いかにも

ホストという風貌をしている。

「話は聞きました。私がこの責任者の坪井つばいです。見たところ、あなたたちは高校生のようですね」

見た目とは裏腹に坪井という男の話し方は丁寧だった。ルックスは私のタイプではないが、醸し出す雰囲気は私好みかもしれない。なぜかそのとき思った。

「はい、そうです」

「そうか・・・実はあの花瓶は・・・いや。とりあえず今日1日タダ働きをしてもらいたいと思っています。そちらの女性には開店前の準備と営業中の裏方の仕事を、男性の君にはヘルプとして僕にってもらいます。ああ、お酒は飲まなくても構いません。そこは私がフォローします」

「わかりました」

そこで素直に、はいわかりました、と言える佐々木がすごいと思っただ。いや、すごくない。ありえない展開に私の頭の中はぐるぐるしていた。

『はははっマジで！？超おもしろー！』

電話で事情を説明し、その返事としての薫かおるの開口一番がそれだった。笑い事じゃないんだ、むしろ心配して欲しかったんだ・・・。そう思いながらも、私の声はひそひそと小声だった。

『で？今日は私の家に泊まっておくことにしておけばいいんだね？』

「そういうことにしてほしいです」

『いいよ。そっちのほうは心配しなくても。それより明日報告しろよ〜』

この友人は、どちらかという私の境遇を楽しんでいるように思える。私はため息とともにケータイを切った。

私が任されたのは、店内の掃除と、グラス磨き。後の仕事は順を追って説明されるという。今は雑巾を片手に『塵1つないように』テーブルの上を磨いている。

体で払うとは、私が考えていたようないかがわしいものではなかった。それはそれで安心したが、今度は佐々木の仕事が気になってしまった。あいつは何をされるのだろうか・・・？佐々木は私と違って単純で純粹だから、嫌な仕事をどんどん押し付けられているかもしれない。

だんだん最悪な考えになってきたところで、近くの扉が開いた。

「あつ、柚芽！見て見て似合う？俺のコスチューム！」

扉から出てきたのは、髪を立たせ、いくらかホストに見えなくもないノリノリの佐々木翔太だった。何を思ったのか、彼は私の耳に手を当ててきて、

「お客様、今夜は眠れない夜にしてあげる・・・」

声と同時に耳元に吐息がかかった。鳥肌が立った。

「どーお？俺の色仕掛け」

「キモイよ！っていうか自信満々にやってる佐々が1番怖いよ！」

「え〜いいと思ったのになあ」

ふてくされた佐々木の背後の扉が開いてぞろぞろとホスト陣が出てきた。ぎよっとするほど大人数だ。開店前にお客を呼び込むキヤッチと呼ばれることをしていると坪井に聞いていたが、いつの間に戻ってきたのだろうか。

「開店だ。カケル準備して」

坪井の言葉に、佐々木は頷いて駆け出す。カケル、どうやらそれが彼の源氏名らしかった。たぶん翔太の翔からカケルという名にしたのだろう。

開店と同時にお客さんは入ってきた。まず、店の玄関口でホスト総出でお出迎え。まるで、バージロードを歩いているかのような気分で、お金持ちのマダムが嬉しそうな顔をしている。持っているバッグも身につけているアクセサリーも素人の私が見ても高価なものであるとすぐにわかった。本当に別世界だ。

常連客はすぐにホストを指名するが、初めて来店したお客さんは

玄関先にずらりと並んだ彼らの顔写真を見て決める。もちろん誰でもいいと言うこともできるらしい。

開店30分後にして店は混雑していた。

私はキツチンで洗い物をしながら佐々木を捜していた。慣れない場所で1人だと心細い上に、さつきから姿が見えないのだ。なぜか意味不明な妄想が頭の中に浮かんできた。

「今ぜつてー変なこと考えてたたる」

気づくといつの間にかグラスを手に抱えた佐々木が背後にいた。

「佐々！いたんだ！」

「今来た。これお願いね」

そう言つてグラスを渡された。

「ねえ．．今何やってんの？さつきから姿見えなかったけど．．．」

「え？坪井さんのところでヘルプに入つてたよ？あつ、やっぱり変なこと考えてたんだ。柚芽はすぐに顔に出るからなー」

笑いながら頭をなでてくれているらしいが、なんとなく髪の毛をぐしゃぐしゃにしているようにしか思えない。だけど、その行為に私は安心した。

「心配しなくても大丈夫だつて。それよりあそこの席見てみるよ」

「どこ？」

「ほら、隅っこの席。茶髪を縦ロールもどきにした女の人がいるんだけど．．．」

「あーわかった．．．なんかどっかで見たような」

「あれ3丁目の雷オヤジの長女だよ。おもしれー！ホストクラブに通つてたんだ。オヤジが知つたら勘当かんどうされるな」

3丁目の雷オヤジはこの辺りでは有名人だ。昭和の典型的オヤジがそのまま平成にやって来たような人で、とにかく怒ると誰であるうと怒鳴り散らす。子供が3人いるのは知っていたが、直接面識があるわけではなく、遠くから見たことがあるだけだった。

「どうしょ．．．実はオヤジはホストでした、なんてオチがあつて、親子の衝撃的対面があつたりして」

「ウケる〜!!」

私を安心させるために雷オヤジの長女の話をしたのか、単純に面白かったからなのか理由はわからないが、それでも私が冗談を言えるようになったのは佐々木のおかげであった。しゃくだけど、少しだけ感謝した。

「カケル、坪井さんが呼んでるよ」

やって来た他のホストの言葉に頷いて佐々木は行ってしまった。

私も食器洗いに専念した。

「ドンペリ入りまーす!」

時々聞こえるこの言葉で、周囲はかなり盛り上がっている。観察していると、トークが面白いことが分かった。話題に事欠かない。そして、常に女性を持ち上げ、女性優先の立場をとっている。ここでは当たり前のことなのかもしれないが、改めて見るとまるで女王様にもなった気分だ。お客でない私に対しても男性陣は優しく、明るい気持ちにさせてくれた。

気になるのが、やっぱり佐々木だ。今度は見える位置に座っているが、最初は明るく場を盛り上げていたのに、急に態度が変わった。仕舞いには、頭まで下げ始めて、最終的に土下座をしていた。

なんだかまたすごく心配になってしまった。

私たちが帰ってもいいと言われたのは午前4時頃だった。どのみち家に帰るつもりはなかったし、また明日もここへ来ることになるだろうと私が覚悟していると、

「今日1日で十分です。ごくろうさまでした。これからは前方に注意して自転車に乗ってくださいね」

「へ?あの、花瓶の弁償は・・・」

思わず、素っ頓狂な声が出た。坪井はにつこりと笑う。

「あの花瓶は、本当はお客様が趣味で作った物なんです。ですが、お金には代えられないと言ってもウチの大切な物。だから、カケル

に直接お客様に事実を話して謝罪してもらったんです。大丈夫、許して頂けましたよ」

だから土下座していたのか……。私はようやく納得した。何も知らなかったのはどうやら私だけのようだった。

「今日その花瓶のお客様が来ることいつ知ったの？」

帰り道、佐々木が自転車を引き、私とその隣を歩きながら尋ねる。

「開店する少し前に坪井さんに教えてもらった」

「一言言つてよ。そしたら私も謝つたのに」

「それはだめ。ここはホストクラブだもんね。柚芽も一応女だし」

「一応は余計だっ」

「ははっそうだな！じゃあ、お詫びに家までお送りします」

そう言つて佐々木は、自転車にまたがった。男が乗るにはサドルが低い、それよりも私が気になったのは、2人乗りをしようとしていることだった。

「乗らないの？」

「なんかやな予感がする」

「だーいじょうぶだよ。早くしないと置いてくよ」

置いてくよ、と言いながら自転車をこぎだすので、慌てて後ろに飛び乗る。

しばらく乗っていて、ふと思った。こんな風に過ごすのは久しぶりだ。ロクなことが起こらなかったが、でも、すごく楽しかった。

懐かしい……

こんな日々が続けばいい、一瞬そう思った。

「げっ！……！」

それは、一瞬だった。その声とともに自転車が斜めに傾いて、遠心力でぽんと放り出された。今度は反対の膝を擦りむいた。

佐々木はというと、転んだ形跡はなく、

「ワリ、大丈夫か？」

「大丈夫じゃないよ！」

「いや・・・人とぶつかりそうになっちゃって・・・」
そのことに気づいて、慌てて佐々木はぶつかりそうになった相手のほうへと駆け寄った。私の位置からだ、四つん這いになっているバーコード頭が見える。そして、傍にはなぜか折れた盆栽があった。

嫌な予感がした。

バーコード頭がゆっくりと起き上がった。

「バカタレー！！！！！！」

朝方にもありえない落雷の音がした。それは、3丁目の雷オヤジだった。

第3章 命がけの体育祭

「ウチの体育祭には伝説があるんだ。毎年各学年ごとに優勝クラスと2位、3位のクラスには校長が趣味で作ったトロフィーが与えられる。それは、なぜかご利益りやくがあるとされていて、特に優勝したクラスのトロフィーはものすげーラッキーをもたらすとされている。だけど、4位以下にはこれまた校長の趣味で作られた小さな埴輪はにわが配られるんだ。これがやばいんだって。最下位のクラスの埴輪は特にありえないらしい」

「・・・ってこういうような話聞いたんだけど、そんなにやばいの？最下位の埴輪って」

季節は5月。この時期、我が香咲学園かみき高校はもうすぐ行われる体育祭の練習や準備で忙しくなる。特に、私と西村は体育委員になつてしまい、人一倍やる人が多いと言っても過言ではない。今も職員室に選手登録表を出しに行くところだった。

「やばいらしいよ。最下位のクラスの子に話聞いたことあるんだけど、まず埴輪自体が突然いなくなったり、かと思つたら急に現れたり・・・あと誰もいないはずの教室から物音がしたり・・・だけど毎年これのためだけに校長がうきうきして作ってるから誰もこんなこと言えないんだって」

「毎年？使い捨てなんだ」

「そう。終業式が終わった後に校長が密かに回収するって話だよ」
言った私自身がなんとなく恐ろしくなってしまう。去年の私のクラスは4位だった。だから、やっぱり埴輪が配られたが、特にご利益をもたらすこともなければ、埴輪が勝手に歩き出すといった怪談めいたことは起こらなかった。

と、そのときだった。何の前触れもなくぱったりと校長先生に出くわしてしまった。さすがに本人の噂をしていたのでぎょっとして

いると、校長自身もびつくりしたような顔になっていた。なぜか、手には埴輪と思われるもの……。いや血のように見える赤いシミのついた埴輪を持っていた。

「きつ君たち！今は何も見なかったことにしてください！」

そう言つて、ダツシユで校長はその場を後にしてしまった。

「カズ・・・今の見た？」

「いや錯覚だろ。血がついた埴輪なんて見てないからな」

「同感」

「柚芽、体育祭は絶対優勝しよう」

「よっしやー！！」

こうして命がけの体育祭が始まった。

体育祭当日。この日は絶好の体育日和・・・にはならず、どんよりと曇った天気になった。

「なんだよー。まるで誰かがわざとこんな天気にしたみたいだな」
何気なくつぶやいた佐々木の一言は、私や西村にとっては笑えなかった。

私が出る種目は、混合リレーのみだった。足の速い薫^{かおる}は、100メートル走と最強リレー。最強リレーとは、400メートルを4人で走るリレーのことで、男女各4人ずつタイムの速い人が選ばれる。西村も同じく、最強リレーと100メートル走。佐々木は、最強リレーと200メートル走を走る。

「あーあ、個人的には西村君と佐々木君の勝負が見たかったなあ」

「何言つてんの、ミッチー」

「だってホラ。どっちが勝つか気にならない？」

うきうきしたような顔でミッチーは屈伸^{くっしん}をしている。

思い返してみれば、佐々木は賭け事のない勝負は好きだったが、走ることに関して西村に勝負をふっかけたところは見たことがなかった。

そのとき、選手登録表を持って薫がやって来た。

「見えるかもよ。100走るはずだった宮川がさつき体調不良で帰っちゃったらしいよ。代わりに佐々木が走るみたい」

「あ、佐々木！」

薫の後ろを歩いていた佐々木に私は声をかける。

「100走るんでしょ？ 埴輪がかかってんだから頑張つてよ」

「あーうーまあ・・・」

「どしたの？ 佐々木君」

ミッチーが心配して尋ねる。

「なんもないんだけど、なんとなくカズとだけは走りたくなかったな」

「なんで？ 負けるかもしれないから？」

答えようとする佐々木だったが、同時に100メートル走予選の召集がかかってしまった。結局走りたくない理由を知ることなく、体育祭は進んでいった。

それから昼の休憩の時間になった。

私と西村はコーンを片付けるために、体育倉庫に来ていたのだが、そこで私たちは見た。倉庫裏にあったダンボール箱の中に山のように積まれた埴輪を。そして、その箱の前で数珠を持って拝むようにしゃがんでいる校長先生の姿を。

私たちはダツシユで逃げた。

「カズ、見た？」

「いや・・・もう何も見てない」

テントに戻った西村は、彼にしては珍しく大声を出して、

「4組ぜってー優勝するぞ！！！！」

「おっしゃあ！！！！」

何も知らないクラスメートは超ノリノリだった。

午後の種目は各種目の決勝戦だった。

100メートル走で決勝まで残った薫は、3位入賞を果たした。

これから、男子100メートル走決勝である。決勝まで残ったのは、6人だけだった。もちろん、佐々木も西村も残っていた。

4組のテントだけでなく、他のクラスの特ントからもちらほら佐々木と西村の名前が聞こえる。あいかわらずの人気だ。

「柚芽はどっちの応援するの？」

薫がニタニタ笑いながら尋ねてくる。

「・・・？どっちも応援するよ？2人とも4組じゃん」

「そういう意味じゃないんだけど。マンガとかでよくある三角関係みたいなのないの？」

「ありえねー」

パンという合図とともに、選手が走り出す。スタートしてすぐは、6人ともほぼ横並び状態だったが、徐々にずれてきた。半分行ったところでトップは佐々木と西村で並んだ。ほんの少しだけ、佐々木のほうが速いかもしれない。

「すご。2人とも速い」

隣で誰かの声を聞いた。私はいてもたつてもいられなくなってしまった。

「佐ター！！カズー！！頑張れー！！！」

そのとき、一瞬だけ、本当に一瞬だったが、佐々木のスピードが落ちたように見えた。残り10メートルで西村がわずかにトップになる。

2人は、ほぼ同時にゴールした。応援席から見ても分かる。1位は西村だった。

その後、続けて200メートル走決勝を走った佐々木は、1年生も3年生も寄せ付けることなく1位になった。しかし、午前中に2本、午後に再び2本走ったからか、テントの中で力尽きていた。

そろそろ最強リレーの召集がかかる時間である。これは、予選などなく、本番一発勝負だった。

「佐ター。起きなよ。まだリレーあるよ」

そのときの私の起こし方は、後から思えばひどかったかもしれない。お茶の入ったペットボトルで寝ていた佐々木の額ぼかばか叩いたからだ。

それでも、何事もなかったかのように起き上がってくれた。

「え？もう召集かかってんの？」

さすがに疲れたような顔をしている。

「ただだけど、もうすぐなんじゃない？リレー大丈夫かあ？」

「大丈夫・・・だけど、あーもーカズに負けたのが悔しいー！」
テント中に聞こえる大きな声だった。

「いつつも負けんだ。最初は俺のほうがり速いんだけど、徐々に追いつかれてすぐ抜かれる。どうあがいても追いつかないんだ。他のことで勝負しても五分五分くらいなのに、走ることだけは絶対にカズに勝てねー・・・くそう」

「それで、カズと勝負したくなかったんだ」

「っていうか、したくない反面、勝負したかった。でも、どっちかってーとしたくなかった」

と、ちょうど体育委員の仕事を終えた西村が戻ってきた。他の友達と二言三言話した後、お茶を飲み私たちに私たちのほうへ近づいてくる。たぶん佐々木と目が合っていたと思う。

「佐々おつかれ。200見てたよ。すげーじゃん」

「でも100は負けた」

「いや、あんなにねばられたの初めてだよ。前走ったときは50メートルでも俺が勝った。今日50だったら俺が負けてた」

「・・・次は俺が勝つ！」

「勝てるもんなら」

ぎゃーぎゃー騒ぎ出してケンカを始める。いつものことだ。なんか時々ケンカのとぼっちりでぼかばか蹴られたりしているような気がするが、これもいつものことだった。

「薰ー!!!突つ走れー!!!」

最強リレー女子の部が始まる。アンカーの薫にバトンが回ってきたときには、総合順位で3位だった。すでに、トップの2組は数メートル先にいる。

薫がバトンをもらい、滑るようにスタートしていく。1人抜かした。あと1人。びゅんびゅん加速していたが、2組のアンカーも速い。そのままゴールした。

「よし！俺たちの番だ！」

佐々木がびよんと起き上がる。

「佐々、カズ。頑張ってるね。命がかかってんだから」

「へ？命？」

きよんとする佐々木の代わりに、西村はげつという顔になった。男子の最強リレーがスタートした。

夕方になると、曇っていた天気はいつのまにか晴れに変わっていた。

閉会式も終わった。それぞれのクラスでテントを片付け、体育委員が用具を片付けることになっている。2年4組は、その中で優勝トロフィーと粗品である埴輪を眺めていた。

「・・・今年からのクラスにも埴輪がプレゼントされるらしいぜ」

「しかも、校長のご祈祷済みの」

後で聞いた話によると、私たちが見た血のついた埴輪は、製作過程で指を切った校長の血がついてしまったようだ。生徒の笑った顔が見たくて、自分の貯金で作りを続けているらしかつた。1年間無事に高校生活を過ごせるようにと願いを込めて・・・

「なんかいいことありそうだなー」

屈託のない佐々木の声は黄昏たそがれの空に吸い込まれた。

第4章 男好きの天才犬

体育祭が終了すると、待つてましたと言わんばかりにやって来るのが、中間テストである。

テストといえば、「私全然やってないよ」と言っている人に限って、なぜか返ってきたテストの点数が良かったりするものだが、私の場合、「やってない」と言ったテストはとことんやっていないので、たいてい平均点以下で返ってくるが多かった。

「柚芽^{ゆめ}つてさ、理系科目はわりとできるのに文系科目はイマイチだよね。今さらだけど、なんで文系に来たの？つてカンジ」

「うっ・・・だつて数学難しくなるつて聞いたし」

薫^{かおる}の言葉はもつともだった。

「だあああ！全然わかんないよ！英語なんて嫌いだー！！」

「じゃあ、あの2人に教えてもらえばいいじゃん。秀明高校出身なんですよ？」

「2人つて・・・カズと佐々のこと？やだよ。中学のとき教えてもらったら、散々バカにされちゃったもん」

「でもこれじゃやばいと思うよー？」

薫は今日返ってきた私の英語の小テストをひらひらとさせた。100点満点中25点という数字が時々見える。このテストの平均点は70点前後だ。

確かにこのままだとやばいかもしれない。私は、ちらりと教室の真ん中で男子たちに囲まれて談笑している2人の姿を見た。バカにされまくったが、その後の中学のテストはかなり点数が良かったことも事実だった。

中間テストまで1週間をきっている。明日の土日が最大の山場だ。2人に頼んでみよう。このままじゃほんとに点数悪そうだしね。私はそう決意した。

勉強を教えて欲しいと必死に頼み込むと、以外にも佐々木も西村もあっさり承諾してくれた。私と佐々木は、今西村の家に向かっている。西村の家は住宅街の一角にあるごく普通の家で、時々遊びに来たことがあった。

ピンポン、とインターホンを押すと西村本人が出た。

『鍵開いてるから入って』 『ぶきしつ!!』

西村の言葉とその背後でオヤジ臭いくしゃみが重なって聞こえた。「あれ？今日誰もいないって言ってなかったっけ？」

「なんか最近犬みたいな生物飼いはじめたらしいよ」

「何ソレ？犬じゃないんだ」

不審に思いながらも、玄関のドアを開ける。と、私は何かを踏んづけてしまいそうになり、避けようと思った拍子につまづいて転んだ。

「あつ、クウ大丈夫か!？」

西村がその何かを抱えるのがわかった。

「それがクウかー。踏まれなくて良かったなー」

と、佐々木。誰か1人くらい私の心配をしてくれたっていいのに、むくりと起き上がると、西村と目が合った。

「大丈夫？」

「遅いよ」

「ごめん。この子、俺んちのペット。名前はクウ。犬みたいだろ」

「・・・犬じゃん。コーギー」

まだ少し黒っぽい毛が混じっているが、茶色い毛並みに胴長短足の体形、尻尾もほとんどない。間違いなくウエルシュ・コーギー・ペンブロークだった。こんなに立派な犬なのに、なぜ犬みたいだろ、と言えるのだろうか。

「ぶるっ」

それが、その犬の鳴き声だった。

「すげー鳴くじゃん！犬みてー」

「いや！むしろ鳴き声のほう犬じゃないような気がするんですけど」

ど！」

佐々木も西村もボケてるのか本気なのかイマイチわからないのだが、とりあえず私たちは中にあがらせてもらうことにした。

2階の西村の部屋は、必要最低限のものしか置いていない殺風景な部屋だった。ベッド、たんす、テーブルに机、本棚、パソコン。それ以外はすべて押し入れに仕舞いこまれているらしい。

「見て見てー！カズのベッドに茶髪の毛がー！」

佐々木が嬉しそうに短めの毛を見つける。私はおおっと思った。

「マジ！？今度彼女紹介してよ！」

「違うっ！！家族の誰かだよ。家で茶髪は母親とクウしかない！」

飲み物を持ってきた西村が慌てて否定した。なんだと私が思ったのに対し、佐々木は理解しなかったようで、

「え？母ちゃんと一緒に寝てんの？」

「・・・クウの毛だよ・・・！それは」

そんなやり取りを無視して、私は持ってきたバッグから英語のノートと教科書を取り出した。薫が言うには、英語なんてちよつと覚えればいいだけの話らしいが、私にはその覚えることが暗号のように思えてしょうがないのだ。

そのとき家の電話が鳴った。西村が電話に出るために部屋を出る。気づくと、いつのまにかクウが傍にいた。

「クウ？どうしたの？」

なんだかかわいらしい顔で私のことを見つめてくるので少し照れる。クウはそのまま下を向いて、くんくんと鼻をひくひくとさせ、近くにあった私の英語のノートを・・・噛みちぎってしまった。びりつと音がする。

「クーーーーー！！！」

私の声に驚いたのか、クウはぶるつと鳴いてから窓へ向かって、あろうことか破いた私のノートの切れ端を窓の外に捨ててしまった

のだ。

「ああああ！何するんだよー！」

「あつちやー・・・今日は風が強いからねー」

隣で佐々木も身を乗り出す。どうしようと慌ててオロオロしていると、視界にクウの姿が入った。なにやら口をもごもごとさせている。

「食べちゃダメー！吐けー！」

「ぶきしっ！！」

豪快なクウのくしゃみだった。さっきインターホンから聞こえたオヤジ臭いくしゃみは、どうやらこの犬によるものらしかった。それはともかく、くしゃみと同時に唾とノートの細かい切れ端が飛んできて、私の顔にぺちよつと貼りついてしまった。

変な悲鳴と変な鳴き声と笑い声が西村家に響きわたった。

西村が戻つてくるとクウは静かになった。たまに私の手を踏んできたりするが、西村の前では悪戯をするようなことはない。西村のことが大好きらしい。佐々木にも懐いているので、クウは絶対男好きのメス犬だと私は思った。

思えば、人懐っこい佐々木が特別に懐いているのが、この西村だと言えるだろう。まるで飼い主とペットのような関係だ。

拾ったノートの半分はすでに風に吹き飛ばされてしまった。仕方がないので、2人に見せてもらおうと思ったら、

「ノート今学校に置いてあるんだ」

とあつさりと言われてしまった。英語のテストは月曜日。赤点は覚悟しなければならぬかもしれない。

ふと、たんすの上にある写真立てが目に入った。

「あつ珍しい。写真だ」

前に来たときにはなかったものだ。ひよこひよこことそれに近づくと、それが学級写真であることがわかった。しかし、誰も見知った顔がない。正確に言えば、佐々木と西村以外は誰も知らなかった。

「それ高1のときの学級写真だよ」

「秀明高校の・・・？」

「そう。それしかなかったんだ、写真」

西村の顔はなんとなく寂しそうに見えた。

そういえば、自主退学してきたと言っていたが、何か特別大きなことがない限り退学なんてしないはずだ。本人たちは言いたくなさそうだから私は理由を聞くことができなかった。

「前の学校に戻りたい？」

なぜこんなに緊張してしまうのだろうか。なぜこんな質問をしてしまったのだろうか。

2人は一瞬顔を見合わせてから、ゆっくりと首を振った。西村が答える。

「・・・もう戻れないよ」

「・・・？どういう意つまり！？」

語尾がおかしくなったのは、私がおかしくなったからではない。背中にタツクルをくらって前のめりに倒れ、壁に頭をぶつけたからだ。たんすの角に頭をぶつけないかった分まだましかもしれないが、今日の私は踏んだり蹴ったりだ。いや、踏まれたり蹴られたりだ。

タツクルをした張本人は、私の近くでぶるつと吠えている。

「クウ、柚芽のことが大好きなんだな」

佐々木がひよいつとクウを抱き上げると、きゅーんとかわいい声を出してみたりしてされるがままにだっこされている。違うだろ、と私が思っつてその様子を見ているとクウと一瞬目が合っつて、ぷいっつとそっぽをむかれた。絶対男好きだよ。

ひよつとしたら私が空気の読めない質問をしたから注意しただけかもしれない。ひよつとしたら、飼い主思いの利口な犬だけかもしれない。真相は闇の中だった。

結局、佐々木と西村には次のテストに出るかもしれないヤマをはつてもらい、無事だった残りのノートを必死に勉強して英語のテス

トに臨んだ。

「柚芽、どうだった？」

返却されたテストを見て私は愕然がくぜんとなった。

「薫・・・見て。93点とっちゃった」

「うっそ！すごいね・・・今までで最高点じゃない？」

テストのヤマはほとんど当たっていた。なにより、クウによつて破かれたページの問題はあまりなく、残ったほう、つまり私が必死に勉強したほうの問題がたくさん出たのだ。手ごたえも十分にあつた。

本当にすごい。西村と佐々木。それからクウ。彼女が天才なのか、ただの偶然なのかはわからなかったが、数日後に西村が、
「クウって犬だったよ」

と教えてくれたことから、正式に犬であることが判明した。っていうか、どこからどう見ても犬にしか見えないけど・・・

第5章 親って超大変

5月になった頃には、すでに西村と佐々木はまるで転校生だったことを忘れさせるくらいすっかりクラスに馴染み、6月に入った今、クラスの中心的存在になっていた。

たぶん体育祭が終わった頃からだろうか。2人はすごく人気になった、とミッチーが教えてくれた。彼らの影響が知らないが、西村、佐々木と名前が出ると、一緒にくっついていて人として私の名前が出てくるらしい。なんだか当の本人たちが知らないところでいろいろ言われているのかもしれない。

その噂の人物の1人、佐々木翔太に初めて別の噂が浮上した。

「はぁ？佐々に隠し子？」

「そうそう！もうすごい噂だよ。さつき佐々木君が小さな子供を保健の先生に預けてたんだって。そのとき、『何かの間違いだと思っただけですけど』って慌てたカンジで言ってたからマジで隠し子だったりして。でも・・・だとしたらちよつとショックだな」

ミッチーの言葉に私も薫^{かおる}もへーと感心してしまった。

チャイムが鳴ったので、もうすぐ足立先生が来てホームルームが始まるだろう。多くの生徒がすでに教室に入っているのに、佐々木がまだ教室にいないことがますます噂に拍車をかけた。

そのとき、教室の後ろの扉が開いた。いつもは犬のようにはしゃぎながらおはよーと挨拶する佐々木が、今日はしょんぼりとうなだれて一言も言葉を発することなく自分の席に着いた。クラスメートの誰もが声をかけることができなかった。

足立先生も教室に入ってくる。いつもはもつとざわざわとホームルームが行われるのに、この日に限ってはしんと静まり返ったまま終わった。

沈黙を破ったのは、他ならぬ佐々木だった。彼はペットボトルの

お茶を飲みながらきよとんとして、

「なんか今日みんな静かじゃない？」

その言葉に、みんな挙動不審にオロオロとする。しばらくして落ち着いている西村が代表して質問をした。

「佐々、隠し子がいたんだって？」

とたんに、佐々木は飲んでいたお茶をぶつと吐き出しそうになっていた。

「はあああ？」

「朝、保健の先生に子供を預けてたって・・・」

「ちっげーよ！俺の子じゃねーよ！」

はつとして、佐々木は教室を見渡す。

「それでみんな今日変なのか・・・」

「で、結局のところどうなんだよ？身に覚えねーのかよ？」

よく喋る男、鳩山大貴はとやまだいきがニタニタと笑いながら尋ねてくる。だんだんクラスの雰囲気も元通りになってきた。

「ないよ。俺彼女いたことないし」

「えっ！？そうなん？意っ外〜！」

「だって照れるじゃん！」

「おまえかわいいな！。今絶対女子の母性本能くすぐりましたぜ」
精一杯照れ隠しをする佐々木の態度は、確かに見てて微笑ましくなってくる。女子のほとんどがクスクスと笑った。

「じゃあ誰の子なんだよ？」

「・・・や、俺にもわかんないんだ。朝起きたら隣で寝てて・・・」

「」

「佐々木の知らない間に弟か妹が誕生してたのかもしれないぜ」

「・・・それはないって。ウチのオヤジすっげー堅いもん」

答える前に一拍置いたことに私と、おそらく西村も気づいた。佐々木のお母さんは、佐々木が小学生のときにすでに交通事故で亡くなっていたのだ。あの頃の彼は、周りに悲しいことを悟られないようにいつも笑顔で接してきたので、逆にそれが痛々しかった。佐々

木は泣いていないのに、なぜか私が泣いてしまったことを思い出した。

今では、佐々木家はとてにぎやかである。彼の他に、似たような性格の双子の妹がいるので、弱腰の父親がいつも大変な思いをしているらしい。

「それに今親が家にいなくてさ、電話しても出ないから確かめられないんだ。学校休むのもアレだったから保健の先生に相談して預かってもらった」

どうやら、佐々木の隠し子の噂はここで間違いであることが証明されてしまったらしい。それにしても、クラスメート全員にこんな心配されるといふか気にされる佐々木は、本当に好かれているんだなと私は改めて実感した。

「みんなごめんな。つきあわせちゃって・・・」

放課後、佐々木の家私、西村、薫、ミッチーの4人が集まり、子供の面倒を見ることになった。これもわからない話なのだが、リビングのテーブルの上にはオムツやミルクの粉などが入った袋が置いてあり、3、4日くらいなら生活できそうだった。

「親戚の誰かの子じゃないのか？預かってくれるように頼まれてたとか」

「覚えはないんだよ・・・」

困ったように頭を抱える佐々木の傍で生後1年に満たない赤ちゃんはびーびーと泣き出してしまった。

「あーよしよし。ミルクの時間かな」

慣れない子育てだったが、ミルク缶の記載どおりにミルクを温めて飲ませた。

「柚芽、お母さんみたい」

ミッチーの言葉がなんだか私には照れくさかった。

「でも、子育てして初めてわかるお母さんの大変さってやつだね」
薫も興味津々にその様子を眺めている。

「俺も早く結婚したいなー」

それは佐々木の言葉だった。

「佐々木君、彼女とか照れくさいんじゃないの？」

「男だし、ほしーよ。相手がいないだけ」

「じゃあ、柚芽なんてどーよ？」

突然話題にあがってしまつてさすがにびっくりしてしまつた。

「幼なじみの三角関係とかないの？」

ミッチーの言葉を聞いて私たち3人は、深いため息をもらした。自分たちでもかなりジジ臭いため息が出たと思つた。

「マンガじゃないんだから、そんなのありえないつて」と私。

「だよな。腐れ縁じゃなくて腐りすぎた縁だし」と西村。

「俺たちつて他人が考えてるような素晴らしい友情で結ばれてるんじゃないくて、自己中心的な人間の集まりつてカンジ」と佐々木。

言つてむなしくなつてきた。ジジ臭い空気が流れた。

いつのまにかミルクを飲み終わった赤ちゃんは、あつとかきやつとか言い始めた。

「ミルク飲んじやつたー？おいしかったかな？」

「きゃーあ」

そのかわいらしい声とともにその子はげつぷを出してきた。それが私の顔にミラクルヒットする。確かに、ミルクを飲んだら空気を出したほうがいいと思うが、まるで狙つたかのように私の顔に向けて出さなくてもいいのに。

手をぶんぶんと振り、笑顔でみんなを見渡した。そして、キッチンに向かつてハイハイをし始めた。

「あつ、もうハイハイできるんだ」

薫と私の間を通り抜けていく。キッチンのテーブルの下までハイハイし、ぺたんとその場に座つた。反動でテーブルが揺れた。

「あぶないっ！！」

西村の声で私ははつとした。揺れたテーブルの上から置いてあつ

たマグカップが落ちてきたのだ。とっさに体を乗り出したが、傍にあったイスに足の小指をぶつけてそのままこけてしまった。

一拍置いて起き上がった。見ると、マグカップは赤ちゃんとは離れた所に落ちていた。関係ないが、プラスチック製らしい。こっちの心臓が縮んだ。

「ほーら、もうお休みの時間だよ」

佐々木が傍に行つてその子を抱き上げた。私の前まで来て、

「はい、お母さん」

「え？ なつ何！？ お母さん？」

「この子のお母さん」

そう言われて赤ちゃんを渡され、私はその子をだっこした。笑顔で手を伸ばしてくる。もともと子供好きだからかその行為がうれしかった。

「あつきゃ」

いつのまに持っていたのか、赤ちゃんは左手にマジックを持っていた。そして、あるうことがキャップを抜いて私の顔にペン先を押し付けてきた。

「ひゃー！ やめてー！ 」

私の右頬にひげが生えた。

「袖芽つていつ見ても飽きないよな」

のんきな佐々木の言葉だった。

「あんたらと関わるとロクなことが起こらないんですけど……」

「

「いや、俺らは楽しいよ」

そんなことを言ってもらいたかったわけではいいのだが、もう何も言う気にならなかった。

私の腕の中で赤ちゃんはすやすやと寝息をたてていた。

佐々木に次に会ったのは月曜日だった。

「あの子供なだけどさ、俺のいとこの子供だったんだ。なんかこ

の前預かってくれって電話がかかってきたことすっかり忘れててさー、そのとき俺寝起きだっかからかなり寝ぼけてたみたいなんだ。

金曜日学校ないとか言っちゃてたらしくて・・・ちなみに名前は聖せい羅らちゃん。俺初めて会ったんだ」

陽気に佐々木はそう言った。

「柚芽、殴っていいんじゃない？」

「そう？カズがそう言うんなら殴っちゃおうかなー」

「いや、待って待って！柚芽、お母さんみたいだった。聖羅も喜んでたよ！俺もなんか久しぶりに母さん思い出すことができたし！」

「・・・え？」

佐々木はにーっと笑う。その笑顔が、本心であることが私にはわかった。

今回の出来事でわかったことがある。まず、子供を育てるということは大変だということ。世のお母さん、お父さんはいつもこんなハラハラしているのだろうか。2つ目、あいつらが来てから私にとってロクなことが起こらないということ。

第6章 夏休み ただの補講日

制服が夏服に変わっても、暑いものは暑い。家から学校まで自転車をこぐだけで、背中は汗でびっしょりである。

こんなときに、朝から晩まで部活をやってる人たちはすごいと思う。夏休み直前に迫ったこの時期は特に部活動に余念がない。私は保健室の近くにある水道で顔を洗っている友人に近寄っていた。

「おつかれ」

顔をびしょびしょに濡らした友人、西村和樹が顔を上げる。私はタオルを差し出した。

「さんきゅ」

「毎日大変そうだねー・・・」

「俺なんかまだマシだよ。試合に出る人はもつと大変」

よくわからないが、西村はまだ試合には出られないらしい。本人は、編入生だし、ケガがまだ完治していないからしばらくは出られないと思う、と言っていた。そのケガというのが左足の神経の損傷らしい。私が覚えてる限り、中学生のときはそんなケガをしていなかった。

「・・・？このタオル俺のじゃん」

「うん。さっき陸上部のマネージャーさんが西村君がいないいないって困ってたから代わりに届けに来たの！カズ、なんでこんな遠いほうの水道まで来てんの？近くにあるのに」

たまたま登校してきた私が、マネージャーの内田真希まきに頼まれたのだ。

ちなみに陸上部はとも少人数でアットホームな部活らしい。途中から入った西村のことも明るく受け入れてくれて良かったと思う。「トレーニング！3年になったら試合に出れるから、それまでに体鍛えんと」

「ふえーすごいねー」

「つていうか負けたくない人がいるし」

「えっ!？誰？佐々のこと?」

「佐々もだけど、あいつ陸上経験者じゃないのにあんなに速いの反則だよ。同じ陸上やってる人で他に負けたくない人がいるんだ」

少し意外だった。多少曲がった性格はしているが、基本的には温和な西村がライバル視している人がいるなんて・・・

「まあ今度合宿があるからそのときに会うかもしないな」

「ねえ、合宿ってどこでやるの?」

「こじ」

「じゃあ、途中で冷やかしに行ってもいい?」

「うわーうざっ」

「ちんたら走つてたら蹴り飛ばすからね」

半分冗談、半分本気で私は西村の肩をばしつと叩いた。

そして、いよいよ待ちに待った夏休みがやって来た。これから約40日間のバカンスが始まる・・・というわけではなく、何を考えているのか終業式の次の日から普通に補講授業があるのだ。夏の暑いさなか、蝉の鳴き声を聞きながら、私たちは日照りの下をかつたるそつに歩くことになる。

「あつっーい・・・暑い暑いあつーい」

補講1日目にして、すでにミツチーのこの言葉は聞き飽きてしまった。かという私も暑さでだらけて机の上に横たわっていた。薫もかある制服のスカートをぎりぎりまで上げて下敷きで扇いでいる。

「あー・・・プールにダイブしたいよー」

「ねえ、夏休みに3人で海行かない?」

私は自分ではなかなかい提案をしたと思っていた。しかし、

「やだ。日に焼けるじゃん」とミツチー。

「それに暑いときに暑い所になんか行きたくないよ」と薫。

「・・・じゃあ山ならいいの?」

海の反対は私的には山だった。半ば冗談でそんなことを言っていると、予想とは異なる反応を返してきた。

「山かー・・・キャンブなんていいかもね」とミッチー。

「下界よりは涼しそうだよ」と薫。

さらに、クラスの他の女子が集まってきてなぜかキャンブに行きたい人がどんどん増えていった。結局、最終的には女子8人、男子も後で聞いてみたところ5人行くことになった。言った本人を差し置いて、物事はあれよあれよという間に決まっていた。

「ねえ柚芽ちゃん・・・佐々木君と西村君も誘ってくれない？」

突然そんなことを言われた。クラスメートでもあまり話したことがない人だ。

「いいけど、カズは部活あるから行けないかもよ」

「あつうん。それでもいいの」

そんなふう慌てて否定されると、改めてあの2人は人気なんだなど実感する。私も恋をしたい。いや、したことがないわけではないのだが、たぶんどれも本気ではなかったと思う。

「あいかわらずモテてるよね、あの2人」

ミッチーが私にだけ聞こえるようにこっそりと喋る。

「私のデータによると、ウチのクラスの3割はマジでどっちかのが好きだよ。でも、みんな柚芽との関係も気になってるみたい」「どうもないっての。それにたぶんカズの好きな人なんとなくわかるもん」

「うつそ！？誰？」

興味津々にミッチーは目を輝かせる。

「陸上部のマネージャーの真希ちゃん。なんとなく匂うんだよねー」「そうかな・・・真希は西村君のこと好きかもしれないけど、えー・・・そうなのかな。じゃあ佐々木君は？」

「佐々はわかんない。一見わかりやすそうでわかりにくいんだよね・・・昔から」

まあ、わからせないようにするのが佐々木だった。それに対して、

掴みどころがなさそうなのに案外掴みやすい西村には、人間臭さがあると思う。私の勘はけっこう当たる。

「わかりにくいっていえば、薫もわかりにくいよね」

その意見には大いに納得できた。薫は考えているのかどうかさえ危うい。

「こら、そこ何言ってるんだ」

地獄耳の薫がつかつかとやって来て、私たちは下敷きの角でべしつと頭を叩かれた。これがなかなか痛い。

「ねえ薫って好きな人いる？」

「奈良の大仏様みたいなパンチパーマの人が好き」

聞くだけ間違いの質問だったようだ。

「キャンプ？」

食堂に飲み物を買っていくついでに私はキャンプの話をして西村と佐々木に話した。がこんつと音がして自販機からジュースが落ちてくる。

「楽しそー！俺行く行く！」

「俺も部活とかぶんなかつたら行く」

佐々木は割と予想通りの反応だったが、西村は意外だった。

「わかった。みんなに伝えとく」

「あーっ！やつと見つけた」

私の声と微妙に関西なまりの男の声が重なった。やたらと大きな声のその人物は、ジャージ姿でつかつかとこちらに歩み寄ってきた。体格の良い、がっしりとした男だった。運動で焼けたような肌のせいか、歯の白さが逆に目立つ。眉毛がなんとなく上のほうにちよんとあるように見えてまるで、

「あ、懐かしー、おじやるさ・・ぶっ！！」

おじやるさんと佐々木が言いかけたところで西村にどつかれていった。

「なんや、ボケとツッコミはあいかわらず健在なんやな」

「っていつか、なんでこんな所にいるんだ？橘たちばなって阪中第1高校じゃなかったっけ？」

何事もなかったかのように西村は続けた。

「そらこつちのセリフや。なんであんたら秀明やめたん？陸上の試合にも顔出さへんようになって心配しとったんやで？」

「温存中。春までには試合に復活できるように今鍛えなおしてんだ」

「まあええけど・・陸上やめてないってわかればええよ。今俺と張り合う敵がおらんで退屈しとったんからな」

話を聞くと、どうやら陸上部の人のようだった。わざわざ西村に会いに来るためだけにここまで来たらしかった。

「おじやるさんは高1のときカズの1番のライバルだったんだよ」

こっそりと佐々木は私に教えてくれた。

「眉毛あんなだけ走ると超速いんだって」

一体眉毛と何の関係があるのだろうか？それにしても、西村が負けたくないと言っていた人はこの人なんだと初めて知った。いつかこの人と勝負している姿を見たい。

「あれ・・その子、西村の友達？」

いきなり橘という男と目が合った。私はびくつとして身構えた。

「なんや、かわいいやん。なー俺と西村が一発勝負して俺が勝つたら付きおうてくれん？彼女になつてーな」

「やめといたほうがいいと思うよ」

私が答えるよりも先に西村が失礼なことを笑顔で言う。さすがにむつとした。

「いいよっ！橘君が勝つたら私付き合っよ」

「ほんまに！？約束やで！そうだ、アドレス教えてくれな！」

今日は様々なことが決まっていっく日だった。

橘が帰った後、さすがに微妙な空気が漂った。西村が心から深いため息をもらす。

「なんであんな約束するかなー」

「だっだって・・・ホラ、むこうも私たちの関係を勘違いして、カズを本気にさせるために冗談で言っただけかもしれないよ?」

「あいつ悪い奴じゃないんだけど、かなりの女好きだよ。自分が勝ったら絶対おまえと付き合うつもりだよ」

確かに、売り言葉に買い言葉だった。感情に任せてつい言ってしまった自分がバカなんだ。

「大丈夫!カズなら負けないって」

「さあ・・・俺足のケガでタイム遅くなってるし。どうなるかわかんないよ?」

そう言っって西村は歩き出す。さすがに後悔してしまった。結果的に西村にすべてを任せることになってしまったのだ。

そのとき、西村が振り返る。

「でも負けるつもりはないから。大丈夫」

西村の顔はどこか生き生きとしているように見えた。なんだか少しだけかっこいいのがまた悔しいが、私はこのとき何の不安も心配もなかった。

大丈夫なんだから、大丈夫。

第7章 夏休み 合宿

その日は、駅前においしいクレープ屋があるという話を聞いて、私は薫と一緒^{かあろ}に食べに来ていた。さすがに人気の店だ。値段はするが、すごくおいしかった。

7月の日差しは半端じゃない。日焼け止めクリームを塗ってたって体はどんどん小麦色に変わっていく。放っておくと顔にまで汗がにじんでいくので、タオルは必需品である。

「今日だっけ？陸上部の合宿」

薫はオレンジジュースの氷をストローでつつきながら尋ねてきた。

「うん。今日が最終日でタイム計るって言ってた」

そのときの私の顔は、たぶんばつの悪そうな顔だっただろう。このタイム次第で私の人生が決まると言っても過言ではない。よく知りもしない男と付き合うことになるかもしれないのだ。

そのことを薫とミッチーに話したら、案の定ばっかじゃないのと言われてしまった。

「でも大丈夫だと思う！カズは負けないって言ってたから」

「気合だけじゃどうしようもなんないんじゃない？」

「むう・・・少しは友達のかわいそうな境遇をいたわってたの」

残りのクレープを私は口の中に放り込んだとき、ケータイがぶんと音を立てて振動した。見てみると、今は話題に出したくなかった人物、橘直人^{たぢひなひと}からのメールだった。

「うげっ橘だ・・・」

「マジ？何て書いてあんの？」

わくわくしたような顔で薫はケータイを覗き込んでくる。この人は、絶対に私の境遇を面白がっている。

『おはよー！今休憩中なんや。今日の午後1時にタイム計るから絶対見に来てな。俺負けないから！勝ったらこの辺案内してなー』< > /約束やでー！』

メールはアドレスを交換したその日から1日も欠かすことなく届いた。まさかメールの文まで関西弁だとは思わなかったが、本人曰く自分が喋っているのは関西弁もどきらしい。メールのやり取りの中で、彼が三重県出身だということがわかった。どうでもよかったが。

「愛されてるねえ」

ニヤニヤと笑って言う薫の言葉にさすがにどきっとしてしまった。「違う！こいつは女たらしなんだよ。女ならとりあえず優しくしとけみたいな？」

言っただけでまたケータイがぶーんと鳴った。まだ橋は私に用があるのかとげんなりしてケータイを見てみると、今度は佐々木からのメールだった。

「また橋？」

「うっん。佐々木からだった」

『今日合宿最終日だろ？カズとおじやるさんの勝負おもしろそうだから俺も見に行くことにした。一緒に行かぬ？』

「ウケる〜!!!」

私の目の前で薫は腹を抱えて笑い出した。いや、なんだって私の周りにはこんな連中ばかりなのだろうか？面白そうだから、単純に興味があるだけ、覚えてる・・・

「そんなに面白いんだったら薫も来れば？」

「行きたいんだけど・・・これからちよつと用事があつてさー」

「何よ、デート？」

半分冗談のつもりで言ったのだが、

「そーだね・・・めんどくさいんだけど」

「薫、援交でもしてんの？」

「なわけないでしょ!!!」

その薫のデートの相手を私を知るのとはそれから約半月後のことだった。

学校の傍にある駐輪場に自転車を停めて、私と佐々木は運動場に向かっていった。時刻は午後12時をまわったところだ。

たとえ昼時でも、部活動は盛んに行われている。体育館ではバスケットボールとバレーボール。テニスコートではもちろんテニス。そして、運動場ではおそらく合宿のために占領している陸上部が活動していた。

「なあ柚芽、すげーよあの人。筋肉ムキムキ！」

佐々木は他校の陸上部員を指差して1人で騒いでいる。確かに、マッスルボディ選手権とかいう大会があったら上位に入りそうな人だったが、陸上部には無駄に筋肉のつけすぎなんじゃないかと私には思えた。

「あー！柚芽ちゃん！来てくれたんやー！」

その陽気な声ですぐにわかる。私はばつと身構えた。

「たつ橘君・・・練習中じゃないんだ」

橘は軽い足取りでこちらに駆け寄ってくる。しばらく見ない間にまた一段と日焼けしたように見えた。

「シヨートスプリンターはもう休憩や。他の奴らはまだやってんけどな。それより来てくれはって嬉しいわー。お昼食べた？まだやったら一緒に食べへんか？」

「あ・・・もう食べちゃった。ごめんね？」

「あちゃーそりゃ残念や。まあ楽しみは先にとつとくべきやな。うん、そうしよ。あれ、佐々木君も一緒やったんや！」

今初めて佐々木の存在に気づいたらしい。1人ハイテンションでマシンガントークをしている。

「どーも！今日の勝負楽しみにしてるよ」

「勝負といえば、あんたも速いらしいな。体育祭のとき100メートルを10秒台で走ったって西村に聞いたで。それに何でも人並み以上にこなすらしいな」

「そんなことないけ・・・」

「まあそうやるうな！俺のほうが器用やしな！」

嫌みたっぷりには橋は続ける。ここまで険悪だといつそ清々しい。

「ほな、そろそろ行かな！」

持っていたタオルを肩にかけ直して、橋は私に手を伸ばしてきた。驚いた瞬間、私は橋にぎゅーっと抱きしめられた。無意識に私はどんつと橋をなかなか豪快にぶつとばしてしまった。・・・いや、私だけでなく佐々木も橋を押したらしいので、2、3メートルぶつとんだようだ。

「ごっごめ・・・大丈夫!？」

慌てて駆け寄ると、意外にもすんなりと橋は起き上がった。

「今のでわかった。なーんで俺がこんな気持ちになってんのが・・・

・絶対西村に勝つで！」

「えっ?どっか打った?」

「大丈夫や。かすり傷1つナッシング!ほななー」

陽気に彼は去っていった。後には、蝉の鳴き声だけが残った。

「・・・本気でくるね、おじやるさん」

「へ?」

佐々木の言葉の意味が私にはわからなかった。

「笑えない勝負になりそう」

いや、最初から笑えないって。内心でつつこんでから、私は運動場を見た。西村がどこにいるのか見えないが、お願いだから負けないでと心の中で懇願した。

午後1時くらいになって、合宿の成果を計るタイムトライアルが行われることになった。それぞれの種目でその準備を行い始める。

「大丈夫かなー・・・」

私は1人つぶやく。運動場がよく見える木陰で私は佐々木と座っていた。

「最初はさ、絶対カズが勝つって思ってたんだ」

佐々木もつぶやくように話した。その言葉が少し意外に思えた。

「カズは何か賭けた勝負事は負けないう。賭けてる物が大切な物であればあるほど絶対負けないう。勝つのが無理だつて言われた勝負でもね。だから今回も負けないうって思つてた。・・・けど、これわかんなくなつてきたな」

「フオローしてるつもりないでしょ・・・」

そのとき西村が見えた。ジャージ姿でスタートの練習をしている。近くに橋の姿も見えることからどうやら一緒に走るようだ。ふと西村と目が合った気がした。遠すぎてよくわからなかつたが、すぐに目をそらされたと思う。

陸上部員がそれぞれの配置につき始めた。そろそろ始まるかもしれない。

第一走者の6人が号砲とともにスタートした。無駄のない動きですぐにゴールした。

西村たちは第二走者のようだった。すでにスタートの準備にかか

る。

「始まる・・・」

まるで佐々木の言葉を合図にしたかのようにな6人がスタートした。横一列でだれがどこにいるのかわからなかつたが、すぐに西村が一步前に出た。・・・いや、西村の向こう側にもう1人走っている人がいる。橋だ。

2人は横並び状態だった。

私の心臓がどくんと高鳴つた。

「カズー!!!」

2人はほぼ同時にゴールした。

結果はわからなかつた。すぐに第三走者が走り出した。

3時過ぎくらいに、合宿を終えた西村が私たちの元にやって来た。

「おっつかれー!」

佐々木が笑顔で出迎える。

「マジ疲れた。体がつたがただし」

「カズ、勝負・・・どうだったの？」

私はおそろおそろ尋ねた。西村はしばらく私を見た後、やがてに
つと笑った。

「0.1秒差で勝ったよ」

「ほんと!？」

緊張が一気に解けた。

「でも正直やばかった。負けるつもりはなかったけど、走る直前になつて橋が俺に言ってきたんだ。『ぜってー勝つ』って。あいつマジでお前に惚れたみたいだな。柚芽と佐々が一緒にいるとこ見て嫉妬してみただし」

その言葉の意味を考えている途中に私のケータイがブーンと鳴り出した。さすがにびっくりした。慌てて待受け画面を見ると、橋からの着信だった。

「もしもし!」

『あ、柚芽ちゃん?俺や・・・結果もう知つとる?』

「・・・うん。今聞いた」

『もしかして近くに西村と佐々木おんの?』

「え、いるよ?」

『なあ・・・耳からケータイ離してくれへん?今から超でかい声で話すから』

「・・・?わかった」

言われたとおりに私はケータイを耳から離れた。一体何をするつもりなのだろうか。

『西村!!佐々木!!聞こえるかあつ!!』

いきなりケータイから橋の声が大音量で聞こえてきた。私たちが人ともびくつとした。

『今回は負けたが次は絶対に勝つ!!そしたら柚芽ちゃんもらつてくで!!俺諦めんからな!!本気やで!!!!』

「わーお。威勢がいいねー」と佐々木。

「っていうか、ただだけ大声で喋ってんのさ・・・」と西村。

「柚芽ちゃん!!」

唐突に私の名前を呼ばれて、はいつと驚いた。

『次勝負して俺が勝ったら俺と付き合ってくれな!!』

なぜかそのときの私は、今までより橘に対して素直な気持ちで付き合えるような気がしていた。微妙な顔をしている2人の目の前で私は言った。

「それはわかんないけど、そのとき私に好きな人がいなかったら、橘君のことかっこいいって思っちゃうかもしない!」

『よっしゃ!好きな人できたら俺そいつぶん殴りに行っちゃうで!』

そして私はケータイを切った。改めて顔を上げると、佐々木と西村が心底どうでもよさそうな顔をして私を見ていた。

「柚芽・・・何言ってるんだよ。あんま期待持たせるようなこと言わないよ」

と、佐々木は深いため息をもらす。

「俺、今度は負ける気がする・・・」

「んー・・・最近頑張ってる人を見るとかっこいいって思うようになったんだ。ほんのちよつとしか見えなかったけど、橘君かっこよかった」

それは、私の心からの本心だった。言わないが、西村のこともかっこいいって思ったこともある。かっこいい=好きではない。だけど、頑張る人を私は応援したいと思った。

「ねえ、今度3人でクレープ食べに行かない?駅前においしいところがあるんだ!」

「柚芽のおごりなら」

佐々木と西村の声が重なる。

げっと思った。あのクレープ屋はおいしいのだが、値段が高いのだ。

第8章 夏休み キャンプ

8月の半ば、世間的に言うお盆休みのときに、私たちは長野県にあるキャンプ場に行った。

最終的に決まった人数は、男女ともに7人ずつだった。西村を含めて部活をやっている人たちにとってお盆が一番都合が良かったらしい。

目的地までは電車とバスの乗り換えで行く。あまり交通に便利な位置ではなかったが、それでも友達と一緒にだと長く歩く道も短く感じる。道中で鳩山はとやまのプチライブなんか始まったりしたので、余計に楽しかった。

ちなみに、私たちにはテントを張る技術がなかったため、キャンプ場ではバンガローを借りることになっていた。バンガローとは、小さな山小屋のようなものだ。ちなみに、このバンガローは、なんと台所、トイレ、お風呂付きのかなり豪華な造りだったが、その分お金はかかる。

私は、ミッチーと薫かおると一緒にバンガローになった。他の4人は隣のそれに泊まる。

「おつきー！なんかすごい楽しくなってきた！」

ミッチーが大はしゃぎで部屋の隅々まで見てまわる。

「ねえ、もう5時過ぎだよ。そろそろ夕飯の準備にかかったほうがいいんじゃない？」

隣のバンガローの1人、津田涼子がひよこりと顔を覗かせてきた。「そうだね。じゃあ、男子たちにも言ってきたほうがいいか。火おこすの時間かかりそうかもね」

そう言って、ミッチーは飛び出していった。残った私と薫で食材と食器を洗いに行き、涼子たちは肉などを切っておくことになった。今夜はバーベキューだ。

「あれからどーなの？橘君とは・・・」
食器を洗いながら薫は尋ねてきた。

「どうって・・・別に時々メールするくらいだよ」

「なんだ。究極の四角関係なんてのになったら面白かったのに」

「ありえないっつの。それよりそっちこそどうなの？援交相手とは
それは7月の終わりに浮上した、薫の恋人疑惑だった。本当はず
っと気になっていたのが、あれから会う機会がなくて聞けなかつた
のだ。

「言つとくけど付き合っていないからね。友達としてこないだは会っ
ただけ」

「誰と？私の知ってる人？」

「まあ気が向いたらそのうち話すかも」

「すっごい気になるんですけど。反論しようと思つて薫のほうに体
を向けようとしたら、ちょうど洗っていたいたけをぼろぼろと地
面に落としてしまった。

「あああああ!!」

「あー何やってんのー」

「3秒ルール!!」

そのルールとは、例え食べ物を床に落としたとしても3秒以内に
拾えば食べられるというものだった。瞬時にしいたけを拾って洗え
ば大丈夫と思つた。しかし、その決定的瞬間をどうやら見られてし
まったようだった。

「あ・・・佐々、カズ・・・」

墨で真っ黒になった手を洗いに来たらしい2人と私はしばらく目
が合った。やがて、

「大丈夫。何も見てないから」

と言つて手を洗つて彼らは去つていった。なんだか気まずい空気
だけが後に残つた。

バーベキューを開始したのは6時半だった。男子が主に食材を焼

いていき、女子はなぜか食べる専門になった。

落としたしいたけは私がりやりやすいように切り込みをいれておいた。3個しか落とさなかったから、他の人が食べる前に自分が先に食べちゃおうと思つてさりげなく狙つた。まず1個しいたけを食べた。別に問題はない。残りの2個も一気に食べようと思つていたら、いつのまにか網の上からなくなつていた。

「あれ！？しいたけがない！」

「三枝さんえ、そんなにしいたけ好きなのかよ」

男子の1人宮川にそんなことを言われた。一瞬宮川が食べたのかと思つた。

「袖芽ゆめ！しいたけなら佐々木君たちが食べちゃったよ」

涼子の言葉でようやく2人が口をもぐもぐとさせていることがわかつた。私は2人の元へ駆け寄つた。すでに遅かつたらしい。

「そのしいたけ・・・」

「ごめんな！俺らしいたけ大好物なんだ！」

佐々木はおどけてそう言ったが、わざと落としたしいたけを食べてくれたことはわかつていた。気を遣つてくれたんだ・・・ありがとう。

「よつしゃー！肉焼けたぜ！」

男子軍団が肉に群がっていった。そのとき、誰よりも先に行った鳩山がすぐに戻つてきて薫の元へ近寄つていくのが見えた。

「あげる」

どうやら肉を取つてきてあげたようだ。薫は別にいいのに、とつぶやきながらもお礼を言つて肉を受け取つた。ひよつとして・・・私の頭の中に変な妄想が浮かんできた。

「うん。怪しい、怪しいよね！」

「ミツチー」

「確証はないんだけど、たぶん鳩山が薫に告白したんだよ。で、薫は友達からならつてことにしたんだきつと。夜2人で薫にバク口させちゃおうよ！」

「オツケー！」

いつもからかわれてばかりだから、たまには私がかかってやるう。頭の中でからかわれている薫を想像すると自然に顔がニヤニヤしてきた。

少し早い修学旅行みたいで私の心はわくわくしていた。

8時半頃、ようやく私たちは片付けに入った。鉄板と網を片付けるのがなかなか困難らしく、男子の中でじゃんけんに負けた人が洗うことになった。見るからにじゃんけんを命をかけている。

「いくよ・最初はグーじゃんけん」

かなりスピード感のあるじゃんけんが始まった。数回あいこになった後、勝負はついたらしい。

「えええっ！俺かよー」

手がチヨキのまま佐々木が嘆いていることからどうやら佐々木が洗うことになったようだ。

「とっとと洗ってこいよ！俺ら花火やってっから」

「早くしないと花火終わっちゃうぜ」

「くそー覚えてる・・・」

みんなそれぞれに炊事棟から離れていく。私はなんとなく1人残った佐々木のが気になってしまった。傍にいた薫に炊事棟に忘れ物をした、と言ってみんなとは逆方向に走っていった。

炊事棟には1人鉄板と格闘している佐々木がいた。私が近づくと佐々木は私に気づいて意外そうな顔をした。途端に、なんで引き返してきたのだろうかと思った。手伝うつもりも正直なかった。

「柚芽？忘れ物？」

「あ・んと、1人で大変なんじゃないかなーって」

「もう超大変！でもじゃんけんに負けたの俺だしね」

なんとなく手伝いはいいと言われているような気がした。

「そっか・そうだね。頑張れ、佐々！」

私はバンガローに戻ろうと思った。なんだか少しだけ悲しい気持

ちになつたのはなぜだろうか。

「ねえ・・・袖芽！」

振り返ると佐々木が鉄板をこする手を休めて私を見ていた。目が合うと、すぐに顔をそらされて、またたわしで鉄板をこすり始めた。

「俺、頑張つてると思う？」

「？頑張つてんじゃない」

「そうじゃなくて・・・」

私は鉄板洗いのことを言っているのかと思つたらそうではなかったらしい。普段の佐々木のことだろうか。

「佐々つて基本的に器用だからさ、頑張らなくても何でもできる気がする。でも・・・」

佐々木は、昔から何でもできた。初めてのことに對しても人並み以上にできたから、一種の天才なのかもしれない。

「佐々が頑張つてること私は知ってるよ」

なんだか少し気恥ずかしかった。ふと佐々木を見ると、また意外そうな顔で固まっていた。

「ごめん・・・私」

「うっん。サンキュー。すっげ嬉しい」

屈託なく笑つて佐々木は蛇口を閉めた。どういつ答えを期待していたのだろうか。でも、

「あ、見てみるよ！星だ・・・」

まるで降つてきそうなほど星が光っていたので、まあ何であろうと良しとすることにした。

バンガローに戻つてくると他のみんなは花火をしていた。

「おっ戻ってきた！2人して何してたんだよー佐々木！」

私はミッチーたちの元へ行くと、ニヤリとした顔で女子一同に出迎えられた。

「袖芽ちゃんは佐々木君とできてたのか」

「違つよ！ただ話してただけだし」

「まあまあ・・・ほれ、花火分けたるよ」

手持ち花火を1本もらい、チャツカマンで火をつけた。シューつと音を立てて白い光が飛び出してくる。

「なんか今思い出した。宿題けっこー残ってるんだった」

「柚芽、なんで今それを言うかな」

「あ、人数分ある。みんなで線香花火やんない？」

涼子の提案でみんなでひっそりと線香花火をつけて見つめた。

「・・・なんか女子みんな線香花火、切くない？」

「柚芽、それを言うな」

男子は男子で手持ち花火をぶんぶん振り回してはしゃいでいる。

良い子はマネしないでください。

「今日来て良かった」

私はほつりとつぶやいた。線香花火の火がぽとと地面に落ちた。

バンガローの1階に布団を敷き、私たちは川の字になって寝ることにした。時刻は12時をまわっている。と言っても、全然眠くなかった。

「ねーねー薫。白状しなよー。鳩山に告られたんでしょー？」

ミッチーがごろごろしながら入り口から見て左側に寝ている薫に尋ねる。

「あーもーうるさい！もう寝るよ！はいおやすみ！」

ぶーぶーと文句を言うミッチーを無視して、薫は布団をかぶってしまふ。私もあきらめて寝ることにした。

目をつむると、みんなでやった花火、それから炊事棟で佐々木と見た満天の星空が見えた。すごく充実したキャンプになった。

第9章 後先考えられず

長い夏休みがあつたという間に終わってしまった。今日から2学期だった。

大量にあつた夏休みの宿題も29日に薫かあるの家に集まってみんなで片付けた。おかげで残りの2日間だけは気楽に過ごすことができた。しかし、また今日から勉強付けの毎日だと思つたと憂鬱ゆううつだった。

下駄箱で靴を履き替えていると、よおと朝から上機嫌な声で声をかけられた。

「あ、おはよー鳩山はとやま」

「おう！久しぶりだな。キャンプとき以来か？」

そう、キャンプのときに鳩山と薫の熱愛疑惑が発覚したのだ。本人はそのことについて聞かれても肯定も否定もしていない。いつそ鳩山本人に聞いてみようかと私は思ったが、なんとなくやめておくことにした。

「そうだね。キャンプすつごい楽しかったよね」

「そういやそんなとき三枝みえきと佐々木失踪しっそうしたんだよね」

「だーかーらー違つっつーの」

この話題をされるのは正直嫌だった。みんなが思っているようなことなんてなかったのに、とやかく言われるのはごめんだ。

教室に行くと、ほとんどの生徒がすでに登校していた。鳩山はさつさと自分の席に向かつていき、私はおはよーと最初に声をかけてくれた涼子たちの元へ行った。みんな雑誌を読んでいるようだった。「何？なんかかわいい服でもあんの？」

私が尋ねると、涼子が怖い顔をして雑誌をつきつけてきた。

「最近この辺でひつたくりがけつこーあるんだって。170センチくらいの痩せ型。右目の下に大きなほくろのある奴！袖芽ゆめも気をつけなよー、ぼーっとしてると簡単にかばん盗られちゃうかんね」

「ないない。私に限ってそれはない！」

その5時間後のことだった。私は自転車の前かごに入れていたかばんを見事にひったくられた。

「それじゃ採用にしましょう。早速明日から来てください」

「はい！よろしく願います」

ひったくりから約5時間後、私のアルバイト先が決まった。警察には一応届けたが、相手はバイクで黒い服を着ていたことしか覚えていないので役立つことなんて何もなかった。こういうとき、ドラマの主人公はバイクのナンバーを覚えたりするのもかもしれないが、そんな芸当は不可能だと思う。代わりにキーホルダーを拾ったが、何の役にも立ちほしない。

かばんの中には、何よりも全財産が入った財布があった。そう、何を思ったのか全財産。

自然とため息がもれた。

家族に話したら、母親にはさんざん文句を言われ、父親には苦笑いをされ、弟にはバカにされた。当然私の周りの友達に話したら同じようなことを言われると思ったので、ミッチーや薫に泣きついたりはしなかった。私がとった行動は、バイトを探すことだった。

三角巾さんかくきんにエプロン。私はうどん屋で働くことになった。

2学期が始まってから2週間が経過した。

平日のバイトは夜の6時から10時まで、休日は3時から10時まで働いている。ウチの高校はバイト禁止だったので、つまりは内緒でバイトしていることになる。どうかバレないことを祈るしかない。

しかし、慣れないせいか授業中に寝てばかりいた。

「柚芽！起きろー！！」

はっとして目を開けるといつのまにか弁当の時間だったらしい。

私は箸はしを持ったまま固まっていたようだ。ミッチーと薫が覗き込んでいる。

「あんたつてありえない所で寝てるよね。前は入学式が終わった後に寝てたし。最近寝れないの？」

「んー……ちょっとねー……」

「もしかして佐々木君たちとなんかあったの？」

意外なことを言われて少しびっくりしてしまった。ミッチーは続ける。

「だって最近一緒にいるとこ見ないような気がして……特に佐々木君と」

「……？そーかな？そんなことないと思うけど」

そう答えたものの自分でもなんとなく線を引いて接しているような気がしている。恋とかそんなものではないと思う。なんていうか、これ以上佐々木に踏み込んではいけないような気がしたのだ。

「それは……恋だよ！三枝君！」

ミッチーがびしつと箸を伸ばしてきた。

「違う違う。そんなんじゃないって」

私は慌ててしまった。今まで西村とも佐々木ともそんなことを言われたことがあるが、どれも根も葉もない嘘っぱちだった。今回もそうだ。そんなはずはない。

と、薫が私の後ろをじつと見つめていた。

「あ……佐々木君」

ぎよつとなつた。慌てて振り返ると……振り返ったが、誰もそこにはいなかった。

「……なーんてうっそ」

「おや？なぜにそんなに慌ててるんですかー？なんか顔も赤いよ」

「ちつがーう！私今日バイトだからもう寝る！」

「え！？袖芽バイト始めたの？」

矢継ぎ早の質問が飛んできたが、私は無視を決め込んでそのまま黙々と弁当を食べ始めた。

やばい……初めて意識してしまった。

その日の夕方、いつものようにバイトをしていると、スーツを着た男性が1人で来店してきた。眼鏡をかけた優しい印象を与える40代くらいの人だった。別に最初は気にならなかったが、店長の知り合いらしかったので気になってしまった。

「店長、あの人は誰ですか？」

「ああ、門脇かどわき先生のこと？ 秀明高校の先生だよ」

秀明という言葉に一瞬反応してしまった。この人ならもしかしたら佐々木と西村の退学の理由を知っているのかもしれないと思った。しかし、部外者である私がそんなことを聞けるはずがなかった。とまどっている、その人と目が合ってしまった。注文のようだった。「じゃあ、この山菜しめじうどんをお願いします」

「はい、かしこまりました。少々お待ちください」

テーブルを離れると、にっと帽をかぶった黒服の男性が入ってきてしまった。なんとなくくっそーと思った。

「いらっしやいませ」

水を持っていくと、すぐに山かけうどんを注文された。

店長が厨房を他の店員に任せて門脇先生のテーブルへやって来た。「やあ、先生。最近来てくれないから寂しかったよ。どうだい調子は」

「上々だよ。久しぶりにここのうどんが食べたくて来たんだ。店長こそ最近はどう？」

「まあなんとか細々とやってるよ」

会話からするとなかなか親しい間柄のようだった。私はなんとなく聞き耳をたてていたが、なんだか盗み聞きのような感じから意識して聞かないようにした。ただでさえ今『盗』という文字が嫌なのに……

「あれ？ いつもつけてるキーホルダー取っちゃったの？」

聞くつもりはなかったが、店長の言葉に私はびくつと反応した。

「ああ。どこかで落としちゃったらしいんだ。豆子のキーホルダー

気にいったのに・・・」

豆子、それは一昔前に流行った豆のキーホルダーだった。人相の悪い豆だが、愛嬌がある。そういえば、こないだ私が拾ったのも確か豆子だ。

「あの！」

私は思わず話しかけてしまった。

「どうしたの、柚芽ちゃん」

「キーホルダーってひょっとしてこれのことじゃないですか？」

ポケットから豆子のキーホルダーを取り出す。門脇先生の前に差し出すと、彼はしばらくそれを見た後申し訳なさそうな顔でゆっくりと首を振った。

「すみませんが、これとは違うようです」

「あっ・・・そうですか・・・すみません、出しゃばっちゃって」

しゅんとなった私の横で何かがかたんと音がした。振り向くとさつき山かけうどんを注文した男性がこちらを見ていた。私も見返してしまった。黒い髪に、痩せ型、身長170センチくらいの、右目の下に大きなほくろ。その人物は私を見て、明らかにやばいという顔をした。

瞬間、ダッシュでその人物は店を飛び出していった。私はすべてを悟った。あいつがひったくり犯だ。

「店長！ちよつと出ます！」

「おい！柚芽ちゃん！？」

私はお構いなしに店を出て行った。数メートル先に男が走っている。私は店の前に停まっていた自転車に飛び乗った。そして、日ごろ登校で鍛えた自転車の足で思いつきりこいだ。あとちよつとで追いつく・・・ところで男が180度向きを変えてまた走り出してしまったので、どうすることもできずにそのまま電柱にぶつかった。頭がクラクラした。

「柚芽ちゃん！」

見ると、店長が走って駆け寄ってくる。その向こうで門脇先生が、

なんとひつたくり犯を捕まえていた。

「大丈夫か！？一体どういうことなんだ？」

「店長・・・あいつひつたくり犯なんです。捕まえてください・・・」

「そこまで言ったのが最後だった。私は生まれて初めて意識を失った。」

目が覚めたのは病院だった。見慣れない天井に、心配そうに覗き込んでいる家族の姿があった。

話によると、電柱にぶつかってひょうしにしたたか頭もぶつけたらしい。そのまま意識がとんだわけだが、命の別状はないそうだ。この後脳に影響がないか検査すると医者さんに言われた。

ちなみに、ひつたくり犯は逮捕されたとテレビで知った。その後のニュースで、私は犯人を捕まえようとして傷を負ってしまった不幸な少女として登場していた。傷といっても、自業自得のかすり傷だったが。

コンコンと病室の扉がノックされた。どうぞ、と答えると門脇先生と店長が入ってきた。

「店長、ご迷惑をかけてすみませんでした・・・」

「何言ってるんだ。すごく心配したんだからね。もうちょっと自分を大切にしないと」

「はい・・・」

私は門脇先生を見た。

「あの、こんなことに巻き込んでしまつてすみませんでした」

「もう二度とあんな危険なマネをしちゃいけないよ」

しっかりと私を見据えた目は、私の心の奥深くを見ている気がした。

「私は君と似たような境遇にたった人たちを見たことがある。もうこんなことはしてはいけないよ。今、自分がここにいられることをもっと考えなきゃだめだ」

後先考えずに行動した自分の行動を私は今さらになつて後悔した。どうして私はこんなにダメな人間なんだろう・・・もつとしつかりしなきゃダメだ。私は2人の言葉をしっかりと受け止めた。

翌日、私がひったくり犯を捕まえようとしてケガしたことがすでに学校に知れ渡っていたことを知った。正確には、電源を切つておいたケータイに多くのメールが届き、それで知った。ついでに私がひったくられたことも知られているようだ。

いつもどおり学校に行くと、クラスメートに出迎えられた。こんなことは初めてだったので少し戸惑つてしまった。傷はたいしたことなかったのだが、ガーゼを当てて包帯を巻いていたのでオーバーに見られるのだった。

「柚芽・・・よかつたー」

ミッチーの言葉も嬉しかった。

しばらくしてようやく席に着くと、西村と佐々木が待つていた。

「ケガ大丈夫か？」

西村が気遣うような顔で尋ねてくる。私は苦笑して大丈夫と答えただ。

と、そのとき頭をぽんぽんとなでられた。佐々木が一瞬顔をうつむかせ、しかしすぐに笑顔になつて、

「心配させんなよな！」

「ん・・・ごめんね」

佐々木が一瞬だけすごく悲しい顔をしたのを私は見た。

みんなの気遣いがすごく嬉しかった。まさか、ひったくり犯を捕まえようとして、失敗して自分で電柱につっこんだなんて口が裂けても言えない。

第10章 告白

きっかけなんてなかった。

よくマンガであるような劇的な出来事が起こったとか、優しくされたとか、ピンチのときに助けてくれたとかそんな都合の良いことは起こらなかった。ただ、気がいたら好きだった。理由もない。突然だった。

でも、世の女子高生は好きになった男子とはいつも一緒にいたいと思うようになるのかもしれないが、いつも一緒にいたせいか私はむしろ距離を置きたいと思うようになった。あからさまに避けるのではなく、1本線を引くようなカンジ。そうすると、自然とそれ以上踏み込むことがなくて安心した。

なんで好きになっちゃんだろう。

そう思うようになったのは、たぶんこの日からだった。その日、日直でたまたまごみ置き場に1人で行くと、佐々木と誰か知らない女の子の姿があった。とっさに隠れると、いくつかの会話が聞こえてきた。

「……………ごめん。すごく嬉しいんだけど、付き合えない……………ごめん」

その後の会話を聞くことができなかった。初めて他人の告白シーンを見てしまった。佐々木も西村もラブレターをもらったことがあるのは知っていたが、こんなふうに真剣に告白されることもあったんだ。

あんなふうに断られるくらいなら、今のままの関係がいい。そう強く思った。

そうしているうちに10月の半ばになり、文化祭のシーズンが近づいてきた。2年4組はお好み焼きと焼きそば屋台を開くことになった。

「こらー！ 袖芽、手を休めるなー！」

「いや、ちよつと待ってよ！ なんで私だけが日曜大工やってんのさ」
気がつけば、軍手をはめて金づちを持ち、左手には釘くぎなんか持
つてたりしてなんとなく大工のゲンさんっていう姿になる。ゲンさ
んって誰だ？

そのときミッチーが私の傍でちよこんとしゃがみこむ。

「だって袖芽のお父さんって大工さんでしょ？」

「大工の娘が大工できるとはかぎらないでしょーが！」

「おっ 袖芽！ 超似合う〜！！」

私の背後で聞こえたその声は他ならぬ佐々木だった。大工のゲン
さん姿を見てげらげらと笑っている。私は平静を装うつもりが、ふ
つちんときた。

「だったら佐々がやんなよ！ か弱い少女にこんなことさせちゃって
いいの！？」

「うーん・・・ほんとにか弱かったら代わるとこなんだけど、俺も
やることあるしなー」

さりげなく私はか弱くないと言っている。なんで私はこの男のこ
とを好きになってしまったのだろうか。

「そっぴやさ、まだバイトやってんの？」

「やってるよ。ちよつと減らしてもらったけど・・・」

「じゃーさ、今度食べに行ってもいい？」

「もー来んなー！ それよりさっさと準備しろよー！」

しっしつと佐々木を追い払ってから緊張した心臓を押さえ込んだ。
いつのまにいたのか薫かおるが私を覗き込んでいた。

「わっ・・・薫かー」

「袖芽、もしかして佐々木君のこと・・・」

「違う違う！！ 違うんだってば！」

こんなにもキになって否定したのは初めてだった。

文化祭まで残り1週間をきった。この頃から実際に鉄板を使って

お好み焼きと焼きそばを作り始めた。

作るのが上手かったのが、意外にも鳩山はとやまだった。お好み焼きをひっくり返すときも豪快に、かつきれいにひっくり返し、出来上がりを食べたときは本当においしかった。

「薫、おいしーね!」

私が茶化すと薫はじーっと私をにらんでしぶしぶくんと頷いた。男子は口々にうめーうめーと言って片っ端から食べていく。その中を鳩山が抜けてきて、紙皿にのった焼きそばを薫に差し出した。

「食べてみねー?」

「あっ・・・うん」

それをクラスメート全員がニヤニヤとした目で見ている。当の本人たちがはっと気づいて慌てて離れた。

「どーぞどーぞ続けて」

佐々木が言うとう鳩山の顔がかつと赤くなった。蒸気機関車のように見てて微笑ましかった。

「おまえら・・・見てんじゃねえよ!!」

「顔赤いよ」

西村の言葉にますます顔が真っ赤になって、クラス中は大笑いになった。薫もゆで卵のように固まってしまった。

文化祭のためのチラシ作りに時間がかかり、私は薫と居残って作っていた。薫はあれからあまり喋りたがらなかった。あまりからかわれることが好きではない上に、みんなの前で恥ずかしい思いをしたからだろう。

「薫・・・怒って・・・る、よね?」

私がおずおずと尋ねると、薫は急に顔を上げて私を見た。

「たぶん・・・私、鳩山のこと好きだ」

「は?」

いきなり何を言い出すのかと驚いてしまった。目をぱちくりとさせる。薫はまっすぐな視線を送り続けてくる。

「そーなんだ！そうじゃないかとは思ってたんだ！そっかー・・・」
「まあ隠すようなことでもないもんね。あんたもでしょ？佐々木君のこと好きになった」

「違っつて！」

「まーまーいい加減に認めちゃいなよ」

少し笑ってそんなことを言われた。認める・・・認めてしまったらもうあきらめられないような気がして嫌だった。言葉にしちゃうともう後戻りできないような気がする。

「それより鳩山君と付き合っちゃうの？」

「そっだねー・・・柚芽が認めたら少しだけ話してみようかな・・・」

「ずるいなー」

私は苦笑したが薫は笑ってなかったのでどうやら本気らしかった。薫は本気で何かを言うとき、決して笑わないのだ。

まあ、いつか・・・急にそんなふうに思えたのはなぜだろうか。

「よくわかんないけど・・・たぶん好き・・・」
「がらっ・・・ばたーん」

その音と私の声が重なった。見ると、教室の前の扉がいつのまにか開いていて、傍に佐々木が倒れていたのだ。扉の向こうには西村がいて、なにやら薫に自分の元へ来るように手招きしている。すぐに薫が教室を出て行ってしまった。

何が起こったのかよくわからなかったが、最悪な状況であることはわかった。

頭の中が真っ白になった。佐々木が起き上がるまでにずいぶん時間がかかったようにも思えた。

なんでこんなことになったのだろう。こんなふうになるなら好きにならなければ良かった。

「柚芽」

名前を呼ばれてびくっとなった。もう逃げてしまいたかった。

佐々木は思いっきり顔をそらして話を続ける。

「おまえさ……俺のこと、好きなの？」

佐々木の顔がこつちを向いたのがわかった。私はうつむいたまま何も言わずに小さくうなずいた。とうとう認めてしまった。でも、すぐに以前見た告白シーンを思いだした。あんなふうに断られてしまふ……また今までのように気楽に話せなくなる……そんなのは嫌だ。

「いやっ……あの……ちがくて……」

なんだかわけのわからないことをつらつらと言ってしまった。もう何を言えいいのかわからない。

「すげーうれしい……サンキュー」

「いや……」

「なんつーか……照れるし、なんて言えいいのかわかんないけど……うわっほんと照れるなー……」

断るならさっさと断ってくれ、私は緊張で立っていられなくなってきた。

「まあ、ぶつちやけて言えばオツケーです」

「は？何が？」

「え……付き合っつて話じゃないの？」

少し頬を赤らめた状態で目をぱちくりとさせる佐々木に、今度は私がきよとんとする番だった。付き合う、それはその言葉のとおりの意味なのだろうか。だとしたら……

「はー長かったなー……」

「え……？」

「俺の片想い期間」

「そんな素振り全然見せなかったじゃん」

「ずっと頑張ってたから。袖芽が俺のこと好きじゃないのわかってたもん。でも超一途いちずに待ってた。そんなん全然気づいてなかったろ？」

私はいきなり顔が熱くなってしまった。こくんとうなずくと、佐

々木はへへつと笑った。

「だからさつき教室の前で、ごめん立ち聞きしちゃったんだけど、すげーうれしかった。今度は俺から言うね」

佐々木は改めて私の目の前にやって来た。どくと緊張した。

「・・・俺と付き合ってください」

「・・・はい・・・」

西日が教室を照らす頃、私たちは両想いになった。

第11章　そして真実は語られる

クラス全員で買ったおそろいのジーンズ生地のエプロンを着て、私たちは開店準備を始める。今日はいよいよ待ちに待った文化祭だった。

私はお好み焼きの下準備とウェイターの仕事をやることになっている。開店時間が10時の予定だから、そのときまでにいくつか作り置きしておかなければならない。慣れない手つきで分量を量り、時々なぜか多くなったり少なくなったりしたが、気にしないことにした。

「柚芽・キャベツ切んのヘッタクソだよね」

容赦ない薫の一言にぐさつときた。確かに、家では全然料理をしないが、もう少し配慮した物言いをしてくれたっていいんじゃないだろうか。

「ねえこの後にまわらない？」

「いいけど、あんた佐々木君とまわるんじゃないんだ？」

「まわらないよ！バレルのやだし・・・」

私たちが付き合い始めたことを知っているのは、本当にごく一部の人間だけだった。薫とミッチー、西村、鳩山、そして橋の5人だ。私になるべく人に言わないでと頼み込んで、親しい人になら話してもいいということになった。実際にミッチーから佐々木を好きだと思われる女子の名前を3人教えてもらったが、全員クラスメートだった。

「あのさー私認めたんだから薫も話してみるんじゃないの？」

「さって・・・忙しー忙しー」

この話になるとすぐにそらされてしまう。不公平だと思いながらも、薫のおかげで私は佐々木と付き合うことができたので強いことは言えなかった。

付き合うと言ってもたいしていつもと変わらなかった。一緒に帰

ることは前にも時々あったし、週末会うこともやつぱりあった。ただ、雰囲気違った。妙に緊張感を覚えるようになったのだ。それは佐々木も同じようで、照れた笑いをすることが多くなった。

「でも柚芽も罪人だよ。もし西村君が柚芽のこと好きだったらどうするの？」

「ないよ。カズはわかりやすいから、それはないって」

「言い切れるの？」

「うん」

はつきりと言い切れた。根拠なんてない。西村は昔から私のことを妹のようにしか思っていない。そして、私も兄のように思っていた。

そういえば、過去にこんなことを言っていたような気がする。私彼女とかほしくないの？と尋ねると、柚芽に彼氏ができたら考えようかなって言うていた。その後、行かず後家にはなるなよとも言っていたから失礼にも程がある。

そうしているうちに他校の生徒や、先輩が多く見られるようになった。私は改めて文化祭が始まったんだと実感した。

私は12時から接客の担当だったので、だいたい2時間はぶらぶらと見てまわることができた。

恒例のお化け屋敷にも入った。私はなんとなく怖かったが、それを表に出すことが嫌で平気なフリをしていた一方で、薫は超平然としてお化けに目をくれることなくずんずんと進んでいったので助かった。お化けはいると思うが、作り物には怖さを感じないらしかった。一瞬だけ、鳩山と一緒ににお化け屋敷に入った薫を想像したが、きゃーこわーいなんて言っただけで薫が鳩山に抱きつくシーンだけは思い浮かばなかった。

フランクフルトの屋台があったので薫と一緒に食べていると、見知った人を見たような気がした。スーツ姿の男性で、あれは門脇かどわき先生だろうか。

「どうしたの？」

「あ・・ううん。ちょっと知ってる人に似た人がいたんだけど、たぶん気のせいだと思う」

すぐに12時近くになった。私たちは急いで持ち場についた。

「翔太ー！カズー！」

人が少なくなってきた午後2時頃、甲高い声が聞こえてきた。簡易厨房の奥に引っ込んでいた西村がまず顔を出した。

「あ・・みんな来てたのか！」

「あああつ！ひっさしぶりー！！！」

佐々木も嬉しそうに駆け寄った。男子2人、女子2人で来ていたそのお客さんは、どうやら西村と佐々木の知り合いのようだった。なんとなく聞き耳をたてていると、秀明高校のときの同級生ということがわかった。それにしても、佐々木は翔太と呼ばれていたんだ・

「新しい生活はどうよ？もう慣れたか？」

「おかげさまでエンジョイしてる。そっちは？変わりない？」

「おまえらがいなくなつて泣いてる奴が多かつたなー・・・3組の田中とか」

「ああ！カズー直線の人！なつかしー」

西村が戸惑った顔をした。仲良く話しているが、女子の1人だけが佐々木を翔太と呼ぶようだ。他の人は佐々と呼んでいた。

「翔太、まさかと思うけど私に黙って彼女とかいたりしないでしょうねー」

「なんだよー彼女つくるのに佳奈かなの許可があるのかよ」

「そうそう！私たちの仲じゃん」

直感的に、この佳奈という女の子は佐々木のことが好きなんじゃないかと思った。

と、そのときだった。

「西村、佐々木、久しぶりだね」

その声に私以上に2人がびくつとなった。その落ち着いた声、間違いない。

「門脇先生！なんでここに・・・」

「そりゃあお好み焼きを食べに来るためだよ」

そう言っつて店の奥に入っつていくと、なぜか私と目が合った。やばいと思っつたときにはもう遅かつた。

「あれ・・・確か君はうどん屋の・・・」

「お、お久しぶりです・・・」

「え・・・先生、柚芽のこと知っつてるんですか？」

佐々木が驚いて尋ねる。

「以前ちよつとね。そうか・・・2人の友達だつたのか」

「は、はい・・・まあ」

「ケガはもう大丈夫かな？」

「はい！もう大丈夫です」

私はすぐにその場を離れてしまいたかつた。薫に呼ばれたのをきつかけにびゅーつとその場を後にした。もしあのままい続けたら、私が入っつてはいけない領域にまで踏み込んでしまふ気がしたのだ。

私がつその人に呼び止められたのは文化祭の片付けに入ろうととしていたときだつた。さつき佐々木と親しそうに話していた佳奈という女の子が、なぜか私の前に現れてこんにちは、とあいさつしてきたのだ。

「さつきはうるさくしてごめんね。久しぶりにあの2人にあつたもんだから私たちみんなハイテンションになつちやつて」

「ううん。そんなこと気にしてませんよ」

私はかぶりを振つて答える。

「ならいいんだ！じゃあね！今度秀明の文化祭にもぜひ来てね！」
立ち去ろうとする彼女を私は呼び止めた。きよとんとした顔で佳奈は振り返る。

「あの・・・あなたは知つてますか？佐々とカズが秀明をやめた理

由を……」

佳奈はしばらく何も言わなかったが、やがてうんとうなずいた。

「教えてください！なんで2人はやめたんですか!？」

「……プライベートに関わることだから私の口からは言えないよ……でも、1つだけ聞いてもいい？あなたはあの2人とって何なの？」

そう言われてもどう答えていいのかわからない。幼なじみ、腐れ縁。でも、佳奈は今ここでそんな答えを期待しているわけではないことはなんとなくわかっていた。

「あいつらにとって私が何なのかはわからないけど……私にとってあいつらは失礼だし、容赦ないし、めちゃくちゃだけど、大切な」

答えになっていないかもしれない。だけど、これが私の精一杯だった。

しばらく佳奈は黙っていたが、にこつと笑うのが空気でもわかった。「そっか……わかった、教える。あんたはきつと本当のことを知ってもいい人間だと思うから……うーん、今年の3月に秀明高校の生徒が1人殺された事件知ってる？」

私の浅い記憶の中からその糸をたどってみる。基本的にニュースに疎いので、新聞もテレビ欄しか目を通さないのだ。しかし、そういえば思い当たらないこともないかもしれない。

「亡くなったのは、間宮航平^{まみやこうへい}。私たちのクラスメートだった……

」

そして、佳奈はあの日の出来事を語りだした。

第12章 2人の過去 前編 (前書き)

少し暴力シーンを含みます。
苦手な方はご遠慮ください。

第12章 2人の過去 前編

秀明高校。この県で超難関校と違って最初に思いつく学校がここである。有名大への進学率も非常に高く、ここさえ出ていれば例え高卒でも就職において有利になるとさえ言われているほどだった。

しかし、通っている生徒は他となら変わりはしない。普通に登校し、普通に授業を受け、普通に寄り道をして帰る。要は時間の使い方が上手い人が多いのだ。それでも変わり者もいる。

「あ・間宮航平だ」

小声で囁かれるその人物は、間宮航平という名の不良だった。赤茶髪に耳にピアス、だらしなく着くずした制服、もし他人が見たら秀明高校の生徒だとは思わないだろうその人物は、この高校でとにかく嫌われていた。間宮に関わると仲間の不良に呼び出されるといった噂も流れた。

だから、みんな自然と間宮とは距離を置いていた。彼らを除いては……

「おーっす！まーみやー！」

軽快な声とともに聞こえる自転車のブレーキ音。間宮が振り返ると、自転車に2人乗りした男子生徒2人組みがつっこんできた。慌てて飛びのくと、さっきまで間宮がいた所で自転車が停止した。

こいでいたのは、西村和樹。後ろに乗っていたのは、佐々木翔太のようだった。ちょうど朝練が終わった後らしい西村と、たった今登校してきた佐々木が朝に一緒にいるのは珍しいことだが、何よりもこんな行為をできるのはこの2人だけだ。

「よっ！1週間ぶりだな、もっとまじめに登校しろよ」

何事もなかったかのように自転車を降りる佐々木に間宮はぶつちんときた。

「おまえらこそ普通に登校しろよ！一歩間違えれば俺をひくところだつたんだからな！」

「ほらさつき言っただろ？普通に登校しないと俺の自転車がやばくなつてくんだよ」

前かこの曲がった自転車を起こしながら西村も言う。フォローしたつもりが、フォローになってないどころか素っ頓狂なことを言っている。

「・・・なんで俺と関わろうとするんだよ」

誰も関わろうとはしない。教師でさえも不定期登校の間宮に対してはもうあきらめている。しかし、同じクラスの佐々木、西村、そういうえば数学の教科担の門脇かどわきも違った。

「なんでつておもしろいから？」

そんなことをなぜ言えるのだろうか。昔から転校が多くて友達付き合いが上手くできなかつた間宮にとつて、こんな人たちは初めてだった。面倒くさかつたが、悪い気は起こらなかつた。

たかがコンビニに行くだけなのに人気のない場所へ連れて行かれ、間宮は暴力をふるわれることが度々あった。こういうのをフクロ叩きというのだろう。もともと中学生のときにストレス解消のために手当たり次第に暴力をふるっていた自分が周囲に目をつけられるのは当たり前のことだとすでにあきらめていた。

どしゃつと金網に体がぶつかったところで一旦不良の動きが止まった。その隙に間宮は体を起こしてそのまま目の前にいた1人に体当たりした。

「うぐつ・・・」

男がうめいてその場にうずくまる。切れた口の端のせいで鉄の味がしたが、そんなことはもう気にしなかった。すぐに傍にいた男を殴りつけ、後ろから押さえつけようとしてきた男を蹴り飛ばす。しかし、相手は7人だったためすぐに押さえつけられてしまった。

「こいつ・・・もう我慢なんねえ・・・」

誰かがそんなことをつぶやいて、間宮の腹を思いつき蹴り上げる。体をくの字に折ってなんとか痛みを緩和かんわしようとするが、すぐ

さま次の蹴りが入った。

「やれ」

リーダー格の1人が仲間にもうつぶやく。すでにぼろぼろになった間宮にはもう逃げる力なんて残っていなかった。誰かの拳こぶしが振り上げられた。

と、そのときだった。殴られると覚悟していた痛みは一向に襲ってこない代わりに、目の前に人影が立っていた。まるで間宮をかばうように。ゆっくりと起き上がってその人物を見ると、がくつとその場にうずくまってしまった。

「カズ!!」

少し離れた所で、顔の前で腕を交差させて不良の攻撃をかわしている佐々木がいた。

「西村！佐々木！なんでここに・・・」

すぐに何が起こったかわかった。さきほど間宮に振り上げられた拳を西村がかばい、逆に別の男に鉄パイプのような棒で足を狙われてしまったのだ。

「おおおい・・・西村！大丈夫か!？」

「超いてー。暴力反対」

そんなことを言いながら、ぐいつと西村は近くに転がっていた微妙に前かこの曲がった自転車の傍へ間宮を押しした。

「早く乗れ！逃げる」

「なっ・・・は・・・」

視界の隅で数人に蹴られている佐々木を見た。なんとか力を振り絞って体を回転させ、ダッシュで西村たちの元へ走っていく。ぎこちない走りだった。近くに転がっていたもう1台の自転車に西村が乗り、佐々木を乗せて2人乗りでござだす。間宮も慌ててその後に続いた。

背後で何か声が聞こえてきたが、お構いなしだった。無我夢中で逃げた。

1番近かった佐々木の家に行き、間宮は手当てを受けた。ちょうど親も留守にしている、双子の妹たちもケンカだー、と言って茶化してきただけで深く追求してこなかったもので、3人にとってはありがたかった。

「なんで助けたんだよ？」

壁に寄りかかって天井を仰いでいた間宮がつぶやいた。

「なんでって質問ばつかな、間宮って。たまたま一緒にゲームやって、たまたまその途中でコンビニに行つて、たまたま変な音を聞いて見に行つてみたら、たまたま間宮がいたんだよ」

西村が左足に包帯を巻きながら答える。血の量はたいしたことなかったが、上手く歩けないらしかった。

「足・・・大丈夫かよ？」

「たぶん。まだ痺れっけど」

「佐々木は・・・？かなりキツそうだったじゃん」

「俺は大丈夫。っていうか、間宮のほうか痛そう」

「見た目ほどたいしたことないんだ・・・痛いのはそんなときだっけっつーか・・・おまえらが来てくれたから軽く済んだ。サンキュー・・・」

今まで誰かに礼を言ったことなんてなかった。礼の仕方も知らなかった。こんな場面での礼だったが、間宮は2人に心から感謝していたと思う。しかし、その一方で妙な胸騒ぎがして内心落ち着かないでいた。

「さっきの何？ナワバリ争いとか？」

こんなときに佐々木が的外れなことを聞くので緊張感もなくなってくる。

「なんだ、ソレ」

さすがに西村がつっこむ。

「テレビでよくあるじゃん。熱血教師もののドラマで生徒が他校の生徒にからまれてるシーン。あれってナワバリ争いじゃないの？」

「・・・それは違つと思つ」

いつも爽やかに笑う西村の顔が引きつった。

「そんなんじゃないよ。あいつらは・・・前に俺がのした奴ら。今日はその仕返しってヤツ」

自嘲気味に間宮は答える。

「じゃあ、間宮が悪いんじゃない」

「その前に俺の弟をカツアゲしてきたから俺は悪くない」

「弟って今一緒に住んでんの？」

西村が尋ねる。間宮は首を振った。

「今は北海道。俺だけがこっちに残ってるんだ」

答えながら、間宮は佐々木が口の端にバンドエイドを貼るのをぼーっと見ていた。そして、急に緊張感が走った。

「おまえら、まさか東条^{とうじょう}たち^{たち}に手え出してねーだろうな？」

「出してないよ。停学とかになるのはごめんだし」

「俺も。陸上出れんくなんのはやだ」

口々に言う2人の言葉に間宮はとりあえず安堵^{あんぷ}した。こいつらだけは絶対に巻き込むわけにはいかないと強く思った。

「なあ・・・間宮、もうケンカなんかするなよ」

包帯を巻き終えて、改めて顔を上げた西村が言った。

「そつだよ。間宮が停学になったら寂しいじゃん。それに数学の門脇先生も気にしてたよ」

「約束しろよ。それと、学校にも来ること」

2人が拳を前に突き出してくる。間宮は戸惑った。こついうときどうすればいいのかわからなかった。わからないなりに、同じように拳を突き出してみた。3人の拳がこつんと重なった。

「ははっ、おまえらってほんつと変だよな」

「類は友を呼ぶってか？」

意味もなく笑えてしまった。それが、最初で最後の夜だった。

翌日、学校に間宮の姿はなかった。別に学校に来ないことなんてしょっちゅうだったので気にすることでもないのだが、西村と佐々

木にはわけのわからない胸騒ぎがしていた。

その原因がわかったのは、昼休みのことだった。1人の男子生徒が慌てて教室に入ってきて大声で叫んだ。

「なあ！間宮が他校の生徒とケンカだつてよ！！」

「マジかよ？」

クラスメートの1人がコメントを返す。

「マジ。今朝間宮が登校してきたときに他校の奴らが待つてたらしくてさ、そいつらと例の建設中のビルでケンカしてんだと」

例の建設中のビルとは、不幸な事件が立て続けに続いたために建設が行き詰っているビルのことだった。

それだけ聞いて2人は同時に立ち上がった。

「おい！佐々木！西村！」

クラスメートの呼び声を無視して、そのビルへと突っ走っていった。

「なんだあ・・・今日は反撃してこないんだなあ。それともできないのか？」

そう言つて、もう何度目かになる蹴りをみぞおちにくらった。けほつと咳き込んでから間宮は赤い痰を吐いた。

反撃できないんじゃない、反撃してやらないんだよと胸中で悪態をつきながら目だけは意志を持ち続けた。あいつらと約束してしまつた。もうケンカはするなつて。面倒くさいが、従つてやるうと考えていた。

不思議だった。あいつらと会うまではただがむしゃらに生きていただけなのに、関わり始めてからは面倒なことばかりだった。こんな痛い思いをするくらいなら、いっそ停学になったほうがマシだ。だけど、約束したから・・・

「その目がムカツクんだよ！！」

顔面に誰かの蹴りが入ったときにはさすがに意識が飛ぶかと思つた。しかし、間宮はやはり東条たちをにらみつけることをやめな

った。意味のわからない意地だった。

と、そのとき目の前が真っ暗になったと思ったら間宮は自分が数メートル吹っ飛んでいることがわかった。何かで頭を殴られた、と妙にはつきりした頭で考えたところで、何も考えられなくなった。

猛スピードで自転車をこぎ、ようやく目的地までたどり着くまでに20分かかってしまった。自転車を放り投げて、しばらく辺りを見渡したが、人影はない。

「まみやー！いたら返事しろー！！」

懸命に声を出すが返事はない。ビルの2階かもしれないと思っ
て西村を振り向くと、一瞬だったがびっこをひいているように見えた。

「カズ・・・もしかして足・・・」

「大丈夫だって。それより」

ガターン

ビルの2階からそんな物音が響き渡った。はっとして上を仰いだ。
2人は顔を見合わせてこくこつとうなずき、階段を見つけてすぐに駆け上がる。

着いた2人の目にその光景が映った。昨日の連中が円を作り、中央にぼろぼろになった間宮の姿があった。

「間宮！！」

叫んでも反応はない。駆け寄ろうとすると、不良たちが行く手を阻むように1列に並ぶ。

「おまえら昨日の・・・ちようどええ。おまえらもここで間宮のようにしてやる」

東条だと思われる男が口の端をつりあげて笑った。

第13章 2人の過去 後編 (前書き)

少し暴力シーンを含みます。
苦手な方はご遠慮ください。

第13章 2人の過去 後編

あと5分で5限めの数学の授業が始まるというときに、1年1組はざわついていた。西村と佐々木が、間宮まみやのケンカ情報を聞いて教室を飛び出してしまったのだ。確証はないが、おそらく例の建設中のビルへと向かったのだろう。

そのとき、いつもより早く門脇かどわき先生が教室に入ってきた。

「あれ、みなさん、どうかしたのかな」

場の空気を読んだのか、しかし場違いなゆっくりとした声で先生は辺りを見渡す。そして、当時学級委員長で泣きそうな顔をしている佳奈を見て止まった。佳奈はわらにもすがる思いで先生の元へ駆け寄った。

「先生……！翔太とカズが……」

すべてを話し終わると、先生はこくんとうなずいて教室中を見渡した。

「今からの授業は自習にします。各自静かに勉強しているように」

「……先生は？」

「3人を迎えにいつてくるよ」

いつものほんとしていいる先生がこのときだけ早口になったからよほど慌てていることがわかった。

先生は教室を出て行った。残された者は彼らの無事を祈るばかりだった。

何かの物音で間宮は目を覚ました。見慣れない天井にはっとして痛む体を起こす。その光景に息を呑んだ。

間宮をかばうように立っている2人の影。肩で息をしているのがわかった。

「西村……佐々木……？」

はっとして2人が振り返る。あちこち傷だらけだった。

「間宮！よかった・・・目覚めたんだな！」

その隙に西村が蹴られて倒れこんだ。すぐに体勢を整えようとするが、がくつとなつてその場にうずくまってしまった。

「カズ！やつぱ足が・・・！」

言いかけたところで、佐々木は顔面を殴られて数メートル吹っ飛んだ。

足？もしかして昨日殴られた足のことか？間宮は考えた。もし自分のせいで西村の選手生命を断ち切ってしまったら？もし走れなくなつてしまつたら？

「佐々！！！」

一方的にやられている佐々木。痛みで動けなくなつていているようだった。こんなふうになつても仕返しをしないのは、学校に行きたいからだ。集中的に足を殴られている西村。それでも佐々木の元へ駆け寄つてかばおうとする。もう東条たちは間宮自身を狙っているのではなく、佐々木と西村の2人も狙っている。東条が振り上げた右手にはナイフが握られていた。まるでスローモーションのように見えた。

反射的に体が動いた。

間宮が倒れるのと門脇先生が現れるのはほぼ同時だった。一瞬何が起つたのかわからなかった。西村も佐々木もその場に固まった。
「・・・警察だ！その場を動くな！」

警察手帳を持った中年の男が先生の後ろから顔を出す。逃げようとする東条たちを男の部下だと思われる警官が取り押さえていった。すべては一瞬で解決した。しかし、間宮は動かない。先生が間宮に駆け寄る。

「間宮・・・！しっかりしろ！！！」

中年男も駆け寄つて体を揺さぶるが、返事はなかった。ゆっくりと脈を確かめると黙って首を振った。間宮は、西村と佐々木をかばつて代わりに刺され、そして死んだ。

門脇先生が2人を交互に見る。

「まずは病院へ行こう」

それだけを言っ、間宮を抱え込む。そのとき、佐々木が倒れた。西村のぼんやりとした頭が急に覚醒した。かくせい

「動脈を切ってる。早くしないと出血多量で危険だ」

佐々木は中年警官に抱えられて、外に停まっていた車に乗せられた。西村はその後に続く。足の感覚がまるでなく、右足でしか歩けなかった。

何が起こったのか何が終わったのかもわからなかった。西村も佐々木も気がついたら病院のベッドの上にあった。

「佐々木さんのほうは明日にでも退院できるでしょう。正直私もあのビデオを拝見しましたが、肋骨にヒビ程度で済んだのが奇跡ですよ。彼はもう大丈夫です。それで西村さんなんですが・・・左足首を骨折してまして、全治2ヶ月。それと、足の神経に後遺症が少しばかり後遺症が残ってしまったて・・・日常生活に支障はないのですが、陸上を続けられるかどうかは今後のリハビリ次第です」

医者の話はその後の2人の経過を物語っていた。

病院に運ばれた2人は、直ちに治療を受けた。意識を失っていた佐々木はすぐに輸血をして一命をとりとめた。間宮は、すでに内臓破裂、出血多量などが原因で心肺停止。手の施ほどこしようがなかったそうだ。

建設中のビルは最近人為的だと思われる不幸な事故が立て続けに起こっている、ビルにいくつかの監視カメラを設置していたらしい。そのビデオには、犯行の一部始終が映っていた。間宮も西村も佐々木も一切相手に危害を加えていなかった。

間宮の葬儀は翌日に行われた。門脇ももちろん出席した。形ばかりで参列している人も大勢いた。その中でわんわん泣いている間宮の弟の姿が見ていて痛々しかった。まだ8歳の小学2年生だった。

その頃入院中だった2人に門脇はそれぞれ会いに行った。いつも

笑顔で明るい佐々木は弱々しい笑みで出迎えてくれた。

「なんとか逃げれるって思ってたんです。後先考えずに行動しました。自分の身一つ守りたかったために間宮を……死なせてしまったんです」

1つ1つ噛みしめるように言葉を発する佐々木を見て、一瞬泣いているのではないかと思った。

「君たちのせいじゃない。佐々木、君はもつと笑ってもいいし……泣いてもいいんだよ」

「俺は大丈夫です……でも……どうやって笑ってたんだろ……泣き方なんてずっと昔に忘れちゃった……」

西村は、元々愛想の良い人間だったので笑顔だけは見せてくれた。「先生が来てくださらなかったら、あの後どうしていたかわかりません。本当にありがとうございます……」

「私がおう少し早く来ていれば良かったんだ。君たちが気に病むことはないよ」

「でも……今思えば他に方法がいくらでもあったんじゃないかと思えます」

どうすることもできなかった。決して消え去ることのない大きな痛みだった。

退院しても佐々木は学校には来なかった。事情を知ったクラスメイトは、みんなとても心配していた。西村のお見舞いに行こうとしたが、気持ちの整理がつくまではそつとしておいてほしいと医者に言われて結局行けなかった。

あの建設中のビルでケンカをしていると話を聞いたが、まだ確証がなかったため知り合いの警察官に電話をして一緒に来てもらった。ちょうど近くに住んでいたので助かったが、門脇はあと少し早く到着していればと後悔しない日はない。退職願の準備もできている。

そんなとき職員室にいと、2人のお客さんが来た。40代の女性と見覚えのある子供……間宮の弟だった。

「間宮さん！」

「先日はご迷惑をおかけしました。間宮航平（こうへい）の母です。息子の葵（あおい）です」

疲れたような声で母親はお辞儀をした。門脇も頭を下げる。

「実は・・・葵が航平の死に立ち会った2人の生徒さんに会いたいと言つてまして・・・無理なお願いだとは承知していますが、お会いすることはできませんか？」

葵はしっかりとした目で門脇を見つめてくる。

「わかりました。ただし、1人はまだ入院中ですので病院でもよろしいですか？」

こくつとうなずいたのを見て、門脇は電話の受話器を手に取る。佐々木翔太の家に電話をかけた。

1週間ぶりに西村と佐々木は対面した。お互いに連絡を取ることも見舞うこともしなかったのだ。

西村の病室で門脇は、葵と2人を会わせることにした。どうなるのかはわからない。

葵はしばらく2人の顔を見た後、母親のほうを向いてこくんとうなずいた。

「すみません・・・もういいそうです」

「え・・・話したいんじゃないんですか？」

さすがに驚いて門脇が直接葵に尋ねると、彼はこくんとうなずいて言った。

「兄ちゃんを守ってくれようとした人たちを見たかったんだ。それに、お兄ちゃんたちなんでしょ？兄ちゃんともうケンカしないって約束した人って」

「え・・・」

「オレがケンカしないでつて言つてもいつも無理かもつて言つてきたんだ。でも、死んじゃう前の日に電話で同じこと言ったら、友達2人と約束したからもうケンカしないって兄ちゃん言ってくれたん

だ」

門脇は警察に見せてもらったビデオを思い出した。一方的にやられていた間宮。確かに、フクロ叩きのように見えたが、少なくとも多少の反撃のチャンスはあったはずだ。反撃できなかったんじゃない、しなかつたんだ。西村、佐々木との約束を守るために……鼻水をすすする音がした。今までこらえていたものがまるで堰を切ったかのように溢れ出した涙を、佐々木は止めることができないでいた。

「あつ……ごめつ……なんか、俺……涙の止め方、わかんねえん……だ」

門脇は、佐々木の頭をくしゃくしゃとなでた。西村のほうを見ると、うつむいて顔を見られないようにして手で頬杖をついている。白い布団に雫の痕がついた。

「ありがとう……」

彼らにとつて背負い込みすぎた荷物を少しは降ろすことができたのではないかと思う。どうか、彼らの未来が明るくなるようにと門脇は心から思った。

間宮親子が帰ってから、門脇も学校に戻ろうとした。そのとき、佐々木に呼び止められた。

「先生、俺学校辞めます」

「あ、俺もそれ考えてました」

西村もあつさりとなんなことを言う。予想外の話だったのでさすがに驚いてしまった。

「どうして……!? 何度も言うが、あれは君たちのせいではなかったんだよ?」

「でも、あのとき先生が来てなかったら、正直退学になってもおかしくないことをしていたと思います。それは否定できません」

佐々木は遠くを見るような目で語る。

「それに、俺たちが秀明にいたら、またいつ東条たちの仲間が仕返

しにくるかわかりません。みんなに迷惑はかけられません」

西村もはつきりとした口調で告げる。

「自分の非力さを理解して、その上で何ができるのか挑戦して・・・
一步を踏み出したいんです。先生のおかげです。だから、先生は辞
めないでください」

2人の意志は固かった。そして、表情も妙にすつきりとしていた。
門脇自身が教師を辞めようとしていたことを2人は知っていたら
しい。

その後、多くの先生が2人の退学をやめさせようと説得にかかっ
たが、彼らは受け入れなかった。最初に退学を認めたのは、他なら
ぬ門脇だった。退学することで、彼らが新たな一步を踏み出せるな
ら門脇は喜んで受け入れるべきだと思ったからだ。

そして3月、彼らはクラスメートに一言も告げることなく退学し
た。まるで明日も学校に来るような態度で下校したそうだった。

香咲学園高校に編入することになったのは、門脇先生の勧めでも
あった。先生と香咲の校長先生が知り合いなのだそうだ。

「ぶつちやけ柚芽ゆめと同じ高校だったのがびっくりだよな」

新しい教室の2年4組に向かいながら佐々木はつぶやく。佐々木
と西村はお互いに別々の高校を考えていたのだが、事情を知った校
長先生が喜んで迎え入れてくれるという話を聞いて、後ろめたい気
持ちにならずに編入できるならと同じ高校の編入試験を受けた。

「良かったじゃん。また柚芽と一緒にの学校で」

「でも、柚芽って俺らが転校したって知ったら、絶対心底嫌そうな
反応しそうだよな・・・」

「それ言えるな」

新しい教室2年4組の前にたどり着いた。扉が開かれる。西村と
佐々木は新たな一步を踏み出した。

第14章 冬休み クリスマス兼誕生日

12月、それは1年の締めくくりの月だ。

私は、少し曇った空に向かって息をはーっと吐いてみる。なんとなく白くなるのが嬉しかった。

家から1分くらいの所にある公園へと自転車を急がせた。最近はそので待ち合わせている相手がいる。

「佐ター！ごめん、待たせたー！」

言った直後、自転車の前輪と道路と歩道の間にある段差に躓いてしまった。体が傾いてそのまま地面に頭から突っ込みそうになって、視界の片隅で佐々木が動いたのがわかったが、そのまま地面に突っ込んだ。

なんとか手をついたので顔を怪我することはなかった。しかし・

「普通さ、こけそうになってる人を助けない？自転車を助けてどーすんの!？」

「いや・・・自転車のほうが手前にあつたから」

がっちりと自転車をつかんでいる佐々木は、あははと笑いながら言うてのける。

いつもこんなカンジだった。2人の過去を知ってから私は普段どおりに接した。ここが2人にとって安らげる場所であつたらいいと思う。

もうすぐ冬休み。そして、もうすぐ佐々木と西村の誕生日だった。

「12月24日が佐々木君の誕生日で25日が西村君の誕生日なんだって」

それは数日前の放課後、ミッチーがなんとなくきつきしながら薫かおるにそう話していた。薫はさして興味なさそうに、いや本当に興味が無いらしくどうでもいいような声でへーと答えた。

「すごいよね！2人とも1日違い！」

「それよりも2人ともクリスマスに生まれてるほうがすごいと思うけど」

「ちなみに・・・鳩山君は2月10日生まれ！バレンタイン前だよ」
薫は興味なさそうにしているが、今度は動揺していることが私にはわかった。

「柚芽は？去年は何あげたの？」

「ええ・・・去年は・・・何もあげてない。メールしただけ・・・」

「ほーじゃあ中学のときは？」

「カズには・・・アジの干物。佐々には・・・なんだったつけ。そんなたいしたものあげてないと思うよ」

「うん。そんな気がする」

ミッチーと薫が少しずつ私から遠ざかっていくように感じるのは気のせいだろうか。

しかし、プレゼントなんて昔から何をあげたらいいのかわからなかった。都合のいいことに2人の誕生日は1日違いだから、まとめあげたこともある。男の好みなんてわからないんだ。

とある策を思いついたのはこのときだった。

「おーい、柚芽？こけたひょうしに頭でも打ったかー？」

はっとして我に返る。そうだ、今この策の第1段階を実行するときだった。

佐々木から自転車を受け取り、私は改めてこほんと咳き込んだ。

「あ、そうだ柚芽。24日って暇？」

先に言葉を発したのは佐々木だった。今まさにそのことを言おうとしていたからさすがにびっくりしてしまった。

「へっ？あ・・・暇だけど・・・」

「じゃあさ、一緒にクリスマスマラソン大会に出ない？」

「は？何ソレ？」

突拍子のない言葉に私は目をしばたかせる。

「よくね？クリスマスにマラソンだってさ！なんかカズが出るっていうからさ、俺も出たくなって、柚芽ももし良かったら一緒にどうかなーって・・・」

その顔は、もうすでに出る気満々らしかった。マラソンなんて私の苦手なことだったりして散々迷ったが、まあ西村と佐々木3人で一緒にいられるということは元々の私の策どおりだったので、

「うん。いいよ」

と答えてしまった。

そうしてクリスマスになった日、市内で開催される『聖なる夜こそマラソン大会！』という意味不明のイベントにはなぜか大勢の人が参加していた。しかも、走る時間帯が午前の部が11時、午後の部が7時と別れている。私たちは午後の部に出る予定だ。

スタートの1時間前、私は受付でゼッケンをもらっていると西村が現れた。

「よ！やっぱ来ると思ったよ」

「そうなの？来ようかすっごい迷ったけど・・・」

「え・・・？柚芽・・・や、なんでもない」

何かを言いたかったのかは知らないが、西村がゼッケンをもらいに言ったので聞くことができなくなった。代わりに無意識に左足を眺めてしまった。春休みに会ったときは普通に歩いていたら、あの事件があったときはもう少し前の話になる。私は正式な日時を聞いていなかった。

たまにドラマで似たようなシーンを見たことがあるが、それで外傷はひどかったらしいが佐々木の肋骨のヒビで済んだケガは本当に奇跡だ。西村はもう普通に走っているのでリハビリは順調ということなのだろうか。

と、戻ってきた西村と目が合った。

「どした？」

「あ……うん、足治ったんだなって」

慌てて言い繕つくろったつもりだったがすぐに地雷を踏ふんでしまったことに気づいた。

「……知ってるんだな」

「あ……うん、ごめん」

「うん。いつかは話そうと思ってたんだ。心配かけてごめん」その笑顔が悲しかった。安らげる場所であつたらいいと思つたのに、辛いことを思い出させるつもりなんてなかったのに。

「そんな顔するなよ。今日はクリスマスなんだから、サンタさん来ねえぞ？」

「……そうだね。うん、ありがと……」

ちょうどそのとき佐々木がゼッケンを持ってやって来た。私は笑顔で迎えた。

午後7時、マラソンはスタートした。

私は自分のペースで走るつもりでいたが、佐々木も西村も私に合わせてくれた。どうやら2人にとって、速く走ることよりもゴールすることに意味があるらしい。星空の下をゆつくりと走り続けた。

「あつ、あれオリオン座だ！」

「いつも出てるだろ。俺なんか部活の帰りにしょっちゅう見てる」そんな佐々木と西村のやり取りを私は隣で聞いていた。めっちゃくちゃだけど、気がつくといつも私の傍にいてくれた。それだけで救われた。

坂もなかったし、ゆつくり走っていたのでペースも乱れなかった。私たちは3人でゴールした。

「はい！誕生日プレゼント。カズにはちよつと早いけど」

私が渡した物を見て、2人はうーんと悩みこむ。

「なに？」

「今度はなんだろうって思って……確か前はアジの干物だったよ

な

「俺んときはキュウリの漬物だったよ。今度はナスとか？」

「・・・食べ物はやめたの！」

佐々木にはキュウリの漬物をあげたんだったと今さらになって思
い出した。今回のプレゼントは、迷った拳句にマフラーをあげるこ
とにした。それぞれのイメージになるべく合うような物を選んだつ
もりだった。

「お、マフラーだ。サンキュー」

「柚芽にしては上出来だね」

「どーゆー意味よ・・・」

失礼なところは昔も今も変わらない。私ははーっと白い息を吐い
た。

帰り道をしばらく歩いたところで、西村がコンビニに寄るから先
に帰っててと言い出した。

「あ、じゃあ私も行こうかな」

「俺も」

「おまえらは来んなよ。せつかく気を遣ってんのに。そうだ、柚芽
ちよいちよいと手招きをされて私は西村に近寄っていく。なにや
ら話したいことがあるらしかった。

「あのマラソンって恋人同士で走るとずっと一緒にいられるって言
われてるんだ。佐々はそれで柚芽を誘ったんだよ」

心臓がどくと高鳴ってしまった。そういえばそんなような話を
ミッチーに聞いたことがある。すごく嬉しかった。

西村はじゃあな、と言ってコンビニのほうへ走っていった。

なんだか変に緊張してしまった。いつも以上に心臓がどくとどくと
鳴っている。

とりとめのない会話をしていると、すぐに私の家の前に着いてし
まった。ん、と何かを渡されたときは一瞬びっくりした。

「え・・・何？」

「今日はクリスマススイブだろ」

そうだ。私は誕生日にばかりかまけてしまつて、まったくクリスマススのほうを意識していなかったのだ。

渡された物は、長細い箱だった。中を開けてみるとかわいい時計が入っていた。

「ありがとう！……つていうか、私クリスマススのことなんて全然考えてなかった……なんかごめんね」

「俺は嬉しかったよ？俺たちのこと考えてくれてて……このマフラー」

そう言つて首に巻いてあるマフラーを示した。

「選ぶのにすごい必死だつたつて向井さんに聞いた」

「ミッチーめ……じゃあプレゼントの中身知つてたんじゃん……」

「それは知らなかつたよ」

なぜか笑つて佐々木は答える。何に対して笑つているのかわからなかつた。

「でさ……柚芽、明日どつか出掛けない!？」

急に態度が急変した。私は佐々木が照れているのがわかつた。そういうえば初めてデートに誘われたと今さらになつて思つた。

「行く!」

私の吐いた息が白くなつて空に上つていった。きれいな星空だつた。

第15章 今年1年の占い

年が明けた。

1年の始まりで最初に楽しみなことと言えば、年賀状だった。今の若者は年賀状よりもケータイで新年の挨拶あいさつを済ませてしまうが、私は年賀状のほうが好きだった。特に、1月1日に届いていると嬉しくなるのだ。

昼ごろに起きていくと、リビングのテーブルの上に年賀状の束が届いていた。クラスメート、親戚、中学生のときの友達。私が年賀状を送っていない人からも届いていて、焦って年賀状を書き始める。と、そのときテレビで今年1年の12星座占いというものがやっていやので何気なく私は目線をテレビに移した。

『みずがめ座の女性は・・・今年はまだ少し女らしく過ごしてみよう！周囲の反応が変わってくるよ！言葉遣いも気品を大切にねっ！男性のあなたは・・・進むことも大切だけど、たまには一歩後退するのもいいかも！新たな進展につながりそう！みずがめ座のラッキーアイテムは卓球のラケットだよ！』

それから、初詣はつもとついでに行ったり、親戚の家に行ったりと忙しくしているうちに、高校の始業式の日になってしまった。

「あ、柚芽ゆめおはよう」

教室に入ると、朝ごはんを食べていた西村と冬休みの宿題を必死になんて片付けている佐々木の姿が目に入った。

「あら、おはよう。佐々木君、西村君」

飲んでいたペットボトルのお茶を危うく吹き出しそうになっている西村を無視して私はにこにここと笑顔で接する。佐々木の持っているシャープペンシルの芯が折れて私の顔にぺちつと飛んできて気持ち悪かった。

女らしく、言葉に気品を・・・今の私にはそれだけだった。

「え・・・なんかキモいよ。どうしたの？」

佐々木が心配してくれているらしいが、キモいとは失礼だと頭の片隅で思いながら、

「そんなことないわ。いつもの私じゃない」

「いつも変だけど、3倍増しで今日は変だぞ。悪いもんでも食ったか？」

そんな西村の言葉にも私はうふふと対応する。なんとなく変と言われれば変なような気がする。と今さらになって気づき始めた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。なんか違う。こんな反応を求めてたわけじゃない・・・・・・・・。」

「変なのは袖芽だけじゃないよ。鳩山はとやまも変だったよな？」

「鳩山？」

うんと佐々木はうなずいた。

「教室に後ろ向きで歩きながら入ってきてさー。なんか登校するときも後ろ歩きだったとか・・・・・・・・。」

思わずぐるんと鳩山のほうを向いた。自分の席で佐々木と同じように宿題を片付けている。その机の上には、卓球のラケットが置いてあった。

そういえばと今さらになって思い出した。確か前にミッチーが、鳩山の誕生日は2月10日だと言っていたはずだ。つまりみずがめ座だ。みずがめ座の男性の運勢は、後退することも大切だと言っていたような気がする。

「鳩山アー!!」

私は容赦なくだんつと鳩山の机を手で叩いた。

「なんだ!・・・・・・・・三枝みぎはらか、びつくりさせんなよ!!」

「鳩山つてみずがめ座なんだよね!？」

「あ、ああ」

びくびくしたような顔で鳩山は答える。私は早口でまくしたてた。

「昼休み、一緒に卓球やんない!？」

「・・・・・・・・おう!やるぜ!同士がいたー!!」

後で思えば、私たちはかなりガキだったのかもしれない。

昼休みに誰もいない体育館の2階を借り、中央に卓球の台をどしんと広げた。ネットを張って私はシェイクと呼ばれるラケットを握る。

「いーい？ 鳩山。勝負は1セットマッチ。先に11点取ったほうが勝ちだよ！」

「おうよ！ ぜってー負けねーかな」

いつのまに勝負になったのか、私と鳩山はなぜか気合が入っていた。得点係として無理やり連れてきた薫かおるとミッチー、興味本位でついてきた西村と佐々木はなんとなくテンションが低そうだった。

「ねえ・・・なにあいつらあんなにはりきってんの？」

薫がどうでもよさそうにミッチーに尋ねる。

「なんか今年1年の運勢を賭かけてるんだって。本人たちは必死なんだよ」

「行くぜ！ 三枝柚芽！」

「来い！ 鳩山大貴だいき！」

勝負は、元卓球部だった私が常に優位だった。初心者相手に一切の手加減なしで私は本気で攻めていった。

「俺、今柚芽と卓球やったら負ける気がする」

ぼそりと西村がつぶやく。

「そうか？ カズは賭け事負けねーじゃん」

「球技はそんなに得意じゃないんだよ。っていうか、気合ですでに負けてる」

「そりゃそうだ」

結果は11対4で私の圧勝だった。買った喜びと同時に一気に現実世界に引き戻されてしまった。4人の観客を見ると、誰1人として何も喋らなかつた。

目の前で、鳩山が悔しそうにしゃがみこんだ。

「あー・・・完敗だわ。柚芽強いな」

初めて名前で呼ばれてすこしどきつとしてしまった。私もその場にかがみこむ。

「大貴もかつこよかったよ。ほら、一步後退つてこういうことだったんだよ」

私は体育館の隅にいる観客の1人、薫を見た。少し赤い顔で驚いたように私たちを見つめていたが、私と目が合うとすぐにそらされてしまった。

「やきもちやいてんだよ。私と仲良く卓球やった上に、今下の名前前で呼んじやったから」

「ちつ違う！そんなんじゃない！」

薫が精一杯否定しているが、ミッチーに背中を押されて前につんのめりそうになりながら数歩こちらに近づいてきた。鳩山も薫に近づいていく。

「倉咲・・・そろそろ返事聞かせてもらってもいいか？」

私の位置からだと鳩山の顔は見えなかったが、薫のことは見えた。うつむきながらその頬は真っ赤だった。

薫が何か答えようとす、そんなときだった。

「ぶえつつつくしゅ！！！」

そのなんとも場違いなオヤジ臭いくしゃみは、いつかの天才犬のクウのようだった。その根源を見ると佐々木があーとぼやきながら鼻をすっている。

「あー・・・すみません。どうぞ続けて」

涙目になりながら何事もなかったかのように振舞う佐々木に、隣にいた西村がチョップをかまし、ずるずると引きずって体育館から出て行った。私とミッチーもその後が続く。

まあこれで貸し借りはなしということ・・・私は体育館を振り返って薫にそう告げた。

翌日、鳩山と薫のカップル誕生はクラス中に波紋を広げた。まず、ガキ大將的な存在の鳩山に彼女ができたこと。その彼女が美人で現

実的な薫だということ。そしてなにより、不釣り合いな2人がお似合いでラブラブだったこと。

朝登校してくるときも、目撃者によると手をつないでいたとか。

「薫、大胆じゃーん」

私は茶化したつもりで言ったのだが、薫にはきよんとした顔をされた。

「え？だって付き合ってるんだもん。柚芽だって手くらいいつなくでしょ？」

私はえっと思ってしまった。付き合い始めて2ヶ月たつが、デートだってクリスマススの1回だけだし、別に登下校をわざわざ一緒にしているわけでもない。学校でいつも顔を合わせるからこれ以上一緒にいる必要性も感じなくなっているのかもしれない。手をつなぐなんて考えたこともなかった。

「用事がなければこれからは大貴と一緒に帰ることにしたからよろしくね」

すでに下の名前で呼んでいるらしい。

「ねえ、ミッチー。私なんだかムカムカしてきたよ」

「同感」

さすがのミッチーも呆れているらしかった。薫だけがやっぱりきよんとして、

「なに？胃でも痛めてんの？」

「薫、ジュース買いに行かね？」

「あ、いいよ」

ちょうど現れた鳩山に薫はほいほいといついでいく。自販機なんて階段を下りてすぐの所にあるのだから1人で行けよと私たちは強く思った。

「それにしても、なーんで私らしく接したのに周囲の反応変わらなかったんだろー・・・鳩山の運勢は当たって私ははずれるなんて不公平だなー」

ぶーぶーと文句を垂れて、西村と佐々木に愚痴ぐちを言うと、2人は顔を見合わせて苦い顔をした。

「そもそも袖芽って根本的に違うんだよ」

「それにある意味で当たってたかもよ。俺らの反応はいつもとは違ってたから」

「そんな反応を求めてたんじゃないんだよ……」

口々にそんなことを言われた私はしゅんとなった。

あのテレビの占いは当たっているのかどうかは微妙だったが、とりあえず薫と鳩山のカップルも誕生したことだし、これはこれで良かったんだと思うようにした。

第16章 ファーストキス

その日は、ただいつもより寒いなーと思う以外は特にいつもとは変わらない日だった。違うと言えば、遅刻しそうになって慌てて自転車をこいできたことだけだろう。

ホームルームが始まる瞬間、私は教室に駆け込んだ。

「三枝さん、ギリギリですよ」

あいかわらずのほほんとした足立先生に苦笑いをしながら自分の席に向かう。髪の毛もぐしゃぐしゃ、きつと顔も赤いだろう。急いで席について顔を隠すようにかばんから用具を出していると、

「そういえば、今日はバレンタインですねー」

足立先生の言葉に私は固まってしまった。しまった・・・今日は2月14日、バレンタインデーだ。すっかり忘れていた・・・

「なんでバレンタインを忘れるかな・・・」

事情を薫かあるとミッチーに話すと、案の定呆れた顔をされた。

自分でもわかつている。今までバレンタインデーにチョコをあげた経験がないのだ。それに加えて、最近は全然テレビも新聞も見なかったもので、世間のことにも疎とつくなっていた。ついでに日にち感覚までもが鈍にぶっていたらしかった。

「どーしよー！今から買いに行っただろうがいいかな!？」

「手作りのがいいんじゃない?だって佐々木君もうチョコ誰かからもらったみたいだし」

ミッチーの言葉に私は固まってしまった。昔は自分のくつ箱を開けたら大量のチョコが落ちてくるといった現象は起きてないが、佐々木も西村も真面目なチョコを5、6個もらってきたことがあるのだ。

「ねえ、薫は手作りしたの?」

「まさか。店で買ったよ。そのほうがおいしいかなって思って」

「うーん・・・そうかあ」

ますます迷ってしまった。

手作りなら、家に帰ればなんとか作れそうだが、渡すのが遅くなってしまうだろう。買って渡したほうが効率が良いような気がする。しかし、普段お世話になっっている分、その気持ちを形で表したかった。それにはやはり手作りだと私は思う。

「決めた・・・やっぱ家に帰ってから作る」

佐々木の好きな生チョコ。作るのに時間がかかってしまうが、もうこれを作ると決めたのだ。

放課後になるまでの時間、私はずっとイライラしっぱなしだった。佐々木とも西村とも会話することなく、帰りのホームルームが終わった瞬間ダツシユで帰っていった。帰りにスーパーに寄り、生チョコの材料を買う。

「ただいまあ。うあつ柚芽ー!!」

弟が帰ってきて、私が台所に立っていることに驚いた。

「めっずらしー・・・料理してんなんて」

「・・・うるさい。そうだ、あんたチョコとかもらったの？」

試しに聞いてみると、弟の浩哉ちやうはぎよつとしたような顔になった。さては自分の思い通りにはもらえなかったなと私は直感した。

「うるっせーよ。柚芽こそなんで今作ってんだよ!!」

まさか忘れていたとは言えない。

生チョコが完成したのは夜の10時半頃だった。最後にココアパウダーを振り掛けて、ラッピングをすると11時になってしまった。いっそ明日にしたほうがいのだらうか。でも、せっかく作ったのだから今日中に渡したかった。ケータイを取り出し、電話帳でサ行を探す。

コール音を無意識に数える。9回目でようやく繋がった。

『柚芽ちゃん? やっほー』

出たのは佐々木の妹だった。予想していなかったので、私は少したじろいだ。

「やつほー。えっと・・・兄貴いる？」

『今お風呂入ってんだけど、たぶんもうすぐ出てくるかも。あ、そうだ柚芽ちゃん、もしかして翔太にチョコあげてなかったりする？』
ぎくつとなる。

「なっなんで知ってんの!？」

『だって翔太、なんつーかちよつとイジけてたよ。チョコもらってきてもあんま嬉しそうにしてなかったしい!？』

語尾が上がったのは向こうで何かが起こっているかららしい。

『何言つてんの!』 『わっ!翔太いたんだ。びっくりした!』

『もしもし!柚芽?』

電話の向こう側の会話が丸聞こえだった。その声に急にどきつとした。佐々木と電話したことはあるが、こんなに緊張したのは初めてだった。

「つと・・・遅くにごめんね?・・・今から会えないかな・・・」

『・・・うん。今からそつち行くよ』

「いいよ!私がそつち行くから!」

『じゃあ、間をとって公園にするか』

承諾して電話を切った。私はラッピングした箱を大事にバッグの中にしまう。

寒空の下、私は自転車をこいだ。

公園で待つこと5分、誕生日にプレゼントしたマフラーをつけて佐々木は現れた。自転車を停めて、寒そうにコートのポケットに手を入れてこちらに近寄ってくる。

「ごめん。ちよつと遅れた」

その髪の毛が少し濡れている。そういえば、お風呂に入っていたと言っていた。私はバレンタインデーを忘れていた自分を責めた。

風邪でもひいたらどうしよう・・・

「私こそこんな時間にごめん・・・」

ベンチから立ち上がった私は言う。寒さと緊張で、暑いのか寒いのかわからなかった。

「いいよ。つーか、その格好寒くね？夜中雪降るって天気予報で言ってたけど」

「大丈夫。皮下脂肪多いから」

佐々木が自分の巻いていたマフラーを私の首にかけると、私が佐々木にチヨコを渡すのが同時に行われた。お互いにびっくりして立ち止まった。先に声を出したのは私だった。

「遅くなっただけど、バレンタイン！生チヨコなんだけど・・・他の子とかぶっちゃったかもしないけど、一応受け取ってくれると嬉しい・・・」

後で思っても、支離滅裂な言葉だ。それだけ心臓がどきどきしていたのだ。

「・・・嫌われたのかと思った」

佐々木はマフラーから手を放す。

「・・・え？」

「今日1日話しかけてこなかったし、帰りはソツコーで帰るし、ちよつと期待してたんだけどなーって思っで・・・イジけてた」

私の手からチヨコを受け取ってくれた。佐々木の本当にイジけていたような顔から、やがて無邪気な笑顔が生まれた。

「だからサンキュー！すっげー嬉しいよ！」

その笑顔が嬉しくて、だけど申し訳なく思った。私はバレンタインデーのことを忘れていたことを正直に話した。佐々木は袖芽らしいと笑った。

と、そのとき頬に冷たい水滴を感じた。

「あ・・・雪？」

空を仰ぐ。どんよりとした雲が空一面を覆っている。佐々木も空を見て、そしてつぶやいた。

「違うよ・・・雨だ！」

言った瞬間、さーっと雨が降ってきた。慌てて自転車を引いてすべり台の下で雨宿りをする。こんなとき、雪が降ってくれたらムードが良いが、やはり上手くはいかないのだろう。

「あ、マフラー濡れちゃう」

私がマフラーを取ろうとすると、佐々木に首にかけられたままのマフラーの両端を持たれる。そのまま引つ張られて、私と佐々木は向き合った。その顔が少し赤くなっていることがわかった。

何をしたいかすぐにわかった。

「目、つむってな」

一拍おいて、私は目をつむった。少しして唇に吐息がかかって、暖かいものが重なった。ほんのちよつと目を開けてみた。閉じた目とまつげが見える。こんなに近くで佐々木翔太の顔を見たのは初めてだった。

ファーストキスだった。

「カズ！はい！チョコだよ！」

翌日、昨日作ったチョコを私は西村にもあげた。ちよつど朝練が終わったところで、西村がくれたになっていたときだった。

「ありがと！てゆうか今食べていい？」

「いいよ。味見してないけどおいしいと思うよ」

丁寧にラップングを開けて西村は1個チョコを口に入れる。しばらくコメントがなかった。

「おいしいよね？」

「ん。おいしい」

その表情が怪しかった。私はチョコを取り上げて、試しに1個食べてみる。……味は腐ったような、すっぱいような、とても食べるものではなかった。

「まずい……」

西村が苦笑している。

その日、佐々木が学校を欠席したのは、昨日のチョコが原因では

ないことをただ祈るだけだった。

幕間 1 小5の初恋

その日は、秋のドッジボール大会が行われていた。4クラスの総当たり戦で、1番多く勝ったクラスが優勝になる。

柚芽ゆめの5年3組は、これから1組と対決する。1組は優勝候補のクラスだった。

「ぜったい勝つぞー!!」
「オー!!!」

クラス委員のかけ声とともに円陣が組まれる。柚芽は隣にいた西村和樹の肩をぽんつと叩いた。

「当ててこーね!カズくらいしかないんだもん、当てる人」

5年生は男子の数よりも女子のほうが多い。特に、3組はスポーツの苦手な人の集まりだった。たぶんドッジボールで、隅に固まるタイプとまん中でボールに積極的に関わろうとするタイプに分けられるとしたら、隅に固まるほうが多いだろう。

現に、3組が今まで勝ち進んでこれたのは西村の活躍のおかげでもある。

次の相手は、同じように今まで勝ち進んできた1組だ。優勝候補と呼ばれる理由の1つに、佐々木翔太の存在があった。基本的に何でもこなす彼はドッジボールでも大活躍だった。

「もちろん!柚芽も当たんなよ」

大きなコートに先に1組が入る。その中に佐々木もいた。クラスメイトと楽しそうに会話している。

試合が始まった。

試合はすぐに動いた。3組の固まっていた女子が続けて1組男子にボールを当てられて外野に移動になった。これで内野は動きやすくなったが、このまま時間が過ぎると、内野の数で負けが決まる。

3組があせり始めたとき、佐々木がボールを取り損ねて外野に行

ってしまった。チャンスが訪れた・・・と思ったときだった。のんきに状況を分析しながらドッジボールに参加していたら、柚芽の顔面にボールが直撃した。

「柚芽！」

頭は当たってもセーフだが、さすがに硬いボールの、しかも佐々木が投げたボールが直撃したのだ。さすがにクラクラしてきて外野に移動する。後で覚えてる・・・と柚芽は胸中で呪った。

その後、別の人を当てて内野に戻ってきた佐々木が奮起して、西村と直接投げ合いになったが、結局ほんの少しの差で3組が負けた。

「柚芽、ごめん・・・大丈夫？」

あの後、鼻血が出て保健室に行ってしまったので、試合終了後に柚芽は佐々木とは会わなかった。その日、帰ろうとすると下駄箱で佐々木が待つていて謝罪された。

「佐々のバカー！！すごく痛かったんだから」

「すっぱぬけちゃったんだよ！ほんとに上手く当てようとしたかった」

「もー絶交だかんね！」

「柚芽！わざとじゃないんだから許してやんなよ」

後からやって来た西村がフォロイーに入る。

と、西村の後ろから数人の男子生徒がどたどたと走ってきた。なにやら興奮した面持ちである。

「おい！和樹ー聞いたか！？」

「え？なんだよ？」

びっくりして西村は尋ね返す。

「1組の内田真希まきがおまえのこと好きなんだってさー」

「和樹はどーなんだよー！」

内田真希といえば、この学校で1番かわいいと評判の子だった。

柚芽は同じクラスになったことがなかったので、話したことはなかった。しかし、クラス委員で偉そうなことを言ってることも、すこ

くモテモテなことも知っていた。

「カズ、どーすんのー？」

佐々木がニタニタ顔で尋ねる。噂を教えてくれた男子連中はすでに帰ってしまっている。柚芽も興味津々で聞き耳を立てた。

対する西村は平静を装おうとしているが、明らかに照れているのがわかった。

「俺のことなんか好きなのじゃないだろ！もうやめろって」

今さっき絶交したはずだったが、柚芽も佐々木も2人で顔を見合わせてニヤツと笑った。

その噂が本当かどうかはすぐに確認することができた。

「最初は否定してただけど、最近はもう否定してないからほんとにカズのこと好きだよ、ウッチー」

同じクラスの佐々木が教えてくれた。ちなみにウッチーとは、佐々木が命名したニツクネームらしかった。

柚芽はなんだかうきうきしてきた。その後の佐々木の言葉を聞くまでは……

「ウッチー、もうすぐ転校するんだって」

柚芽にはわかっていた。単純な付き合いの時間の長さでは、佐々木よりも西村のほうが長かったからだ。保育園からずっと一緒に、西村の考えていることはなんとなくわかっているつもりだった。彼は、内田真希のことが好きだったのだ。

真希が転校する日、そのことをそれとなく西村に言ってみると、彼は初めてそれを認めた。昔から、柚芽にだけは正直なことを話してくれた。

「まあ……好きっていうか、いつつもキツイこと言ってるけど、ほんとは優しいんだなって……何言ってるんだ俺」

気恥ずかしそうに左手で口元を覆う。だからこそ、このままだともったいない気がしてきた。柚芽は猛スピードで1組に向かってい

った。

残された2人はなんだか嫌な予感がしていた。逃げようとする西村を佐々木はがちつと捕まえる。

「まーまー。カズの悪いトコはすぐ逃げようとするトコだなー」

さすがにむつとした顔で西村は言い返す。

「佐々木だつて別に今柚芽に告りたいわけじゃないんだろ!？」

知られたくなかった自分の気持ちを誰よりも知られたくなかった人物にバレていたことを佐々木は初めて知った。

「なっなんだよ・・・!それとこれとは話が別だろ!」

「別じゃねーよ!同じだ!」

「違う!ウツチーは今日転校してっちゃうんだ!」

売り言葉に買い言葉だった。佐々木がはつとして我に返ると、半ば呆然とした顔で西村が固まっていた。まさか、と佐々木は思った。

「カズ・・・まさかウツチーが転校すること知らなかったなんて言わないよな?」

そのとき、柚芽が戻ってきた。その顔ですべて察しがついた。

真希はもう学校にはいなかった。

それほど落ちこんではいないようだが、やはり考えるところがあるのだろ。その日1日、西村の口数は少なかった。結局柚芽としては1度も真希と話すことなく終わってしまった。

あの噂が流れたのは、ドッジボール大会のときだったらしい。1組の真希がずつと3組の西村のことを見ていたから、クラスの男子がからかっていたそうだ。

帰りに柚芽は西村と2人で下駄箱に行くと、西村のくつ箱に黄色い便箋びんせんが入っていた。差出人は内田真希のようだった。

「カズ・・・私先帰ってるよ」

「あ、うん。ごめん」

その便箋に何が書かれてあったのか結局西村は語ることはなかった。しかし、その翌日の彼の表情は妙にすっきりとしたように見え

た。

それは、小学校5年生のときの淡い初恋だった。

それから約5年と半年。

もう二度と会うことのないと思っていた内田真希と意外な所で西村は再会することになる。

「新入部員なんですけど、一応2年の西村和樹です。専門は短距離です。よろしくお願いします」

顔を上げた瞬間、ある人物と目が合った。彼女は陸上部のマネージャーだった。

第17章 修学旅行 前編

香咲学園高校の最大のイベントと言っている、修学旅行が2年生の3月にある。行き先は毎年決まって九州だ。2泊3日で鹿児島から長崎まで九州を縦断する。

なんと言っても修学旅行の醍醐味だいごみと言えば、夜に友達の泊まる部屋に遊びに行つて遅くまで喋ることだ。

1 泊目の夜、私と薫かおる、ミッチーの泊まる部屋にクラスの女子が遊びにきた。

「よっ！遊びにきたぜ」

元気印の小山ゆりを先頭にぞろぞろと入ってくる。少し内気な渡辺歩美、おしゃれに気を遣っている須藤瑠奈も彼女に続く。

話は自然と恋の話になっていった。

「・・・でさ、7組の中野がほんとは鳩山はとやまのことが好きなんだって」「へー・・・」

薫は平静を装っているが、明らかに動揺していることが見てわかった。それを面白がつてゆりは話を続ける。ミッチーと同じくらいゆりも噂話には通じているのだ。

「まあ、鳩山とは小学校からずっと一緒だったもんね。仲もいいし、案外まんざらでもなかつたりして」

薫の顔がぎよつとする。とうとう我慢できずに私とミッチーと瑠奈は笑い転げた。薫がむーっとした。そんな顔もするらしい。

「ごめんごめん。鳩山もモテルんだから気をつけなよって話」「ゆりがすかさず言つてのけた。

「でもモテルつていたらあの2人のほうがすごいよね」

瑠奈がちらつと私を見てきた。すぐに何を言いたいのか理解した。「こないだウチのクラスの男子が体育やってたときに3年の女子が騒いでたよ。学年問わず人気だよね」

歩美が感心して言う。それにゆりが反論した。

「かつこいーけどさー・・・完璧すぎない？もうちょつと欠点あつてもいいなー」

「実際どうなの？柚芽は」

瑠奈は初めからそれが聞きたかつたらしかつた。私は言葉につまる。ミッチーも薫も何も言おうとはしなかつた。

「これ1年生が言つてただけど、バレンタインデーに柚芽が佐々木君に告つたけど佐々木君は今の関係がいいと言つてオツケーをしなくて、それから3人の関係が妙にぎくしゃくしてきた・・・とか何とか。それつて本当なの？」

ゆりが早口でそんなことを言つた。視界の片隅でミッチーが今にも笑い出しそうになつてゐるのを私は見た。

そもそもバレンタインデーが終わつた日から、確かに私たちはよそよそしくなつたと思う。10年以上友達として付き合つてきた佐々木とキスなんてしたのだ。あの後、家まで送つてくれた佐々木はノロケと言われてもおかしくないが、本当にかつこよかつたのだ。

その翌日、たぶん私のチョコか、あるいは風呂上りに寒い所に呼び出したのが原因で佐々木が風邪をひき、2日後に会つたときから無視ではないが、露骨ろこつに目をそらされるようになった。

薫とミッチーにはケンカしたの？と心配された。

ひよつとしてチョコがまずすぎて怒つてゐるのかもしれない。

「・・・きつかけとかはないんだけど、気づいたら佐々木のことが好きになつてて、それで付き合うことに」

かなり省略して私は言つた。その瞬間、えー！！！とゆり、歩美、瑠奈の3人が大声を上げた。

「知らなかつた！えつちゃん、この修学旅行中に佐々木君に告るつて言つてたよ？」

ゆりがあちゃーというような顔をする。えつちゃんと言われても、私には誰だかわからない。

「えつ！？えつちゃんつて大学生の彼氏がいるつていう・・・？」

ミッチーだけが反応する。

「別れたらしいよ。ここだけの話、相手が超ヤキモチやきでウザかったんだって」

「うわー・・・ヤキモチやく男とかウザくね？」

さつきまでからかわれていた薫が反応した。他の女の子はヤキモチやかれたいと口々に言っていたが、私はどうだろうか。考えてみても、佐々木がヤキモチをやくような人間には思えなかった。

と、そのとき部屋のドアがノックされた。私たちはぎゃつと驚いてしまった。ドアが開く。

「あらまあ・・・もう消灯時間は過ぎているのよ。もう寝なさい」
足立先生の声でなんとなく眠くなってきた。ゆりたちは慌てて自分の部屋に帰っていき、私たちは就寝した。

翌朝、いつもより早く目の覚めた私は外の空気を吸いにタオルを持って1人でホテルの廊下を出て行った。誰もいないロビーに降りていき、外に出ようとする。

「あ、袖芽？」

誰かに呼び止められるなんて思ってもいなかったので驚いて振り返る。そこにはジャージ姿の佐々木がいた。同じように1人でいて、意味もなくどきつとしてしまった。

「おはよ・・・早いなだね」

「俺、環境変わるとあんま寝れないんだよ。子供みただけだ」

苦笑して答えた佐々木に、私は少し安心した。普通に話しかけてくれた・・・と思っただけで目をそらされてしまった。

「じゃ・・・俺戻るよ」

さすがにショックだった。もうちょっとだけでも一緒にいてくれたっていいのに、目をそらされるのがどのくらい傷つくのかわかっているのだろうか。

私はタオルを丸めて、立ち去ろうとする佐々木の後頭部に向かって投げつけた。昔、ドッジボールで佐々木に顔面にボールを当てら

れたことを思い出す。当てられた佐々木は驚いて振り返った。私は彼の胸倉を掴んだ。

「言いたいことがあるなら言ってよ！チョコがまずかったこと怒ってるの！？それともバレンタイン忘れてたこと！？それとも……」

思い当たる節が多すぎる。言葉につまってしまつて私は掴む手から力が抜けていった。と、佐々木が私の手首を掴んで、

「何してるの!？」

女の声が重なった。その声のほうを向く。見ると、髪の毛の長い綺麗な女の子がそこにいた。

「あ、えっちゃん……?」

佐々木の声に私はびくつと反応した。それにしても佐々木は私より交友関係が広そうだ。

「翔太！大丈夫?」

慌てて駆け寄ってくるえっちゃん。まるで私が佐々木に暴力でもふるっていたような雰囲気だ。それにしても、翔太なんて馴れ馴れしいと私はむかつとした。こういうのをヤキモチというのだろうか。えっちゃんが私を見る。

「……出しゃばっちゃつてごめんなさい。でも、このままじゃ良くないような気がしたから……」

何をやっているのだろう。急に現実に引き戻された気がした。

「ごめん！もう戻るよ」

私は猛ダツシユで階段へと走つていった。追いかけてはくれなかった。視界がなぜか潤んだ。

2日目は団体行動だった。私は極力男子軍団とは遠く離れた場所で行動していた。

2、3度佐々木が私に声をかけようとしていたが、友達と話し込んだり、トイレに行ったりしてとにかく関わろうとはしなかった。それがどれだけバカなことかはわかっている。それでも自分の行動

を止めることができなかった。

長崎の名所をまわっているとき、西村が男子の輪を外れて私のところへやってきた。

「よー、夫婦ゲンカ中？」

「べつにー」

私は不機嫌な顔をした。本当にかわいくない態度である。

「何があつたかは知らないけど、許してやれよ。あいついいヤツなんだよ」

「わかつてるよ・・・小さい頃からずっと友達だったもん」

「じゃあ、なんでまだ怒ってんだよ？」

西村が頭上にある木を眺めながら言う。私はうつむいた。

「私が意地張ってるだけ・・・」

しばらく沈黙が続いた。西村はただずっと頭上を仰いでいるだけだった。何も言ってくれないことがむしろありがたかった。

やがて西村が口を開いた。

「柚芽」

んー？と私は顔を上げる。西村はただ前方を見ていた。

「なあ・・・他のみんなどこ行ったと思う？」

「どこってここにいるじゃ・・・」

そのとき、やっと気づいた。そこにいたのは全然知らない顔ばかりだった。薫もミッチーも佐々木もない。私はさーっと頭から血の気が引くのを感じた。

そのとき、私のケータイが鳴った。慌てて電話に出た。

『もしもし柚芽？あんた今どこにいるの！？』

電話の相手は薫だった。

『柚芽と西村君がいなくなつたってこつちじゃ大騒ぎだよ！』

「うん。カズも一緒にいる・・・すぐにそっちに行くから足立先生には内緒にしよう。それと今どこ・・・」

唐突にケータイが切れた。どうやら電池がなくなつたらしかった。慌てて私は西村に向き直る。

「カズ！ケータイ持つてるよね！？」

「はは……でかい荷物のほうに入れっぱなし……」
文字通り、私たちは迷子になった。

第18章 修学旅行 後編

時刻は午後1時半になるところだった。私と西村は3時に集合する予定の場所まで行くことにした。ここからだといぶ歩くことになる。

とは言っても、知らない土地だ。迷子のうえにさらに迷ってしまいそうだった。

「長崎は坂が多いな」

西村がぼつとつぶやく。言われてみればそうかもしれない。今も上り坂で私は死にそうだった。

「カズ・・・ごめんね。なんか私のせいでこんなことに・・・」
「柚芽のせいじゃないだろ。俺が話しかけたんだから俺のせいだつて」

笑いながら、西村は財布を取り出して中からテレホンカードを出す。ちょうど近くに公衆電話があったのだ。受話器を取ってスムーズに番号を押していく。

ケータイがなくても誰かの電話場番号を覚えてるんだと私は感心した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ、すみません間違えました」

「カズ？」

「試しにかけてみたけどやっぱり違った」

そう言いながらまた番号を押していく西村。私は絶対かからないような気がしてきた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・佐々？よーっす」

繋がつながったらしい。初めからその番号を押してほしかった。

「大丈夫だよ。ああ、うん。ケータイ切れただけだから。今どこにいる？」

しばらく会話してから急に私に受話器を突き出してきた。よくわからずそのまま受け取る。耳に当てると受話器から声が聞こえてき

た。

『もしもし。カズー？』

ぎくとして私はすぐに耳から離す。佐々木だとはわかっていたが、今は会話なんてできなかつた。じつと西村に見られたが、やがて受話器を受け取ってくれた。

「ごめん……じゃあそういうことで……元気だつて。代わるうか？」

そう言つてもう一度受話器を渡される。西村の目には逆らえなかつた。

「もしもし……」

『袖芽！？良かった……大丈夫そうだな……』

今朝会つたばかりなのに、なんだか久々に聞いたような声だつた。「……大丈夫。ごめんね、なんか迷惑かけちゃつて」

『ほんとだよなー。倉咲さんたちも心配してるから早く戻つてきなよ』

私たちは電話を切つた。出てきたテレホンカードを西村に返すと怒つてはいなさそうだが、にらまれたような気がした。

「佐々は最初に袖芽の安否を聞いてきたよ」

西村はカードを財布にしまおうとする。

「2人が気まづくなると俺までどうしていいかわかんなくなるからさ」

だから、佐々木を許してやつて、そう西村は言つた。よく考えてみれば、悪いのは私だつた。それを佐々木のせいにして勝手に怒つて、そうではないと気づいても意地を張つて素直になれずにいるのだ。佐々木は私のことをちゃんと考えてくれているのに。

帰ろう、早くみんなの所へ。それから佐々木に謝ろう。

私と西村は集合場所へと急いだ。

「い……イモ」

「も……モアイ」

「い……またいー？……イカ！」
「貝」

集場所まで行く間、私たちはしりとりをして帰ってきた。そのためか、それに夢中になってしまい、みんなと再会できたときの喜びが一步遅かった。

ちなみに、西村に「い」で始まる単語ばかりを言われてしまったのでだんだん単語に尽きてきた。

「い……いー威張りくさった」
「柚芽ー!!!」

オヤジと言いそうになった私の声に、甲高い声が重なった。気づくとミッチーが抱きついてきた。

「ミッチー、どうしたの？」

「ごめん！すぐに気づかなくて……佐々木君に言われるまで気づかなかったの！」

私がいなかったことに気づかなかったことに対しての謝罪らしい。私は別に怒っていなかったなので、大丈夫と言って頭をぼんぼんとする。

ミッチーによると、最初に私と西村がいなくなったことに気づいたのは佐々木らしかった。その場にいる人みんな居場所を知らなくて、薫が私のケータイに電話したのだ。

「急に切れたからびっくりしたよ」
薫が苦笑いで言う。

「そうだよ！それで佐々木君元気なくなっちゃって……あつ、もう付き合ってることみんなにバレてるよ。みんなの前で認めちゃってたもん」

驚いて佐々木を捜す。西村や鳩山^{はとやま}たちと一緒に談笑している。今は話しかけにくいけれど、後で絶対話しかけようと思った。

その後、以前ミッチーに聞いた佐々木のが好きなクラスメイトとはどう接しているかわからなかったが、なんとなく佐々木自身がそう言ってくれたということが私には嬉しかった。

帰りのバスの中、私は疲れきって爆睡はくすいしてしまった。まだ体力に余裕のある男子たちがノリノリでカラオケをして盛り上がっていたらしいことを私は後で知った。だんだんとみんなの疲れがまわって最終的にほとんどの生徒が寝てしまったそうだ。

学校に着くと、すぐに解散になった。正直早く帰って寝てしまいたかったが、行きに車で送ってもらったため、帰りは歩くことになっていた。私は半ば荷物を引きずるようにして歩き始めた。目が佐々木を捜していた。

しかし、いくら捜してもわからなかった。私はしばらく待つてみたが、結局あきらめて帰ることにした。

「柚芽」

名前を呼ばれたときは心臓がひっくり返るかと思った。佐々木が門を出たところはずっと待っていてくれたようだ。

「一緒に帰ってもいい・・・？」

少しだけ遠慮したような言葉だった。私は緊張した面持ちでこくんとうなずいた。

私が怒っているかと思っっているのだろうか。いつも話題につきない佐々木が話そうとはしなかった。私も謝るべき言葉を探していた。こんなことは初めてだった。

「佐々・・・あの、おとといはごめん！なんか怒鳴ったりして・・・」

佐々木が驚いたような顔でぶんぶんと首を振った。

「俺が悪いんじゃない！俺がずっと微妙な態度とっちゃったから・・・ごめん」

私は少し意外に思った。いつも楽観的な佐々木がしゅんとなることは珍しいからだ。

「・・・嫌だった・・・？」

「・・・そりゃあ目をそらされたりするのは傷つくよ・・・」

「・・・え？あつ、そっちか！そうだよな・・・ごめん」

何について言っていたのだろうか。なんとなく挙動不審にしている佐々木を私はじつと見つめた。視線が痛そうに佐々木は目をそらす。顔が赤く見えるのは気のせいだろうか。

「何が嫌だったって言ったの？」

「もう言わない！！」

「言つてよー！」

「ずんずん進んでいく佐々木を私は慌てて追った。と、バレンタインデーに待ち合わせた公園にたどり着く。そういえばと私は思い出した。

「佐々、あのチョコすごくまずかったのを怒ってたんでしょ？」

「え？チョコおいしかったよ」

「ウソだ。私後で食べてみてすごくまずかったし」

「ほんと。それに俺怒ってないよ」

「きよとんとしたような顔で佐々木は言う。私はじつと目を見つめた。今度はそらされなかった。

「俺・・・あのときテンションがおかしくて、後でよく考えたらいきなりだったなーって思っ、袖芽に嫌われるのはヤだった。もし嫌だっと思われてたらどうしようって」

「ようやく何が言いたいのか理解した。キスしたことを言っているのだ。私は意外に思いつつ、思い出して恥ずかしくなった。

「私は佐々木の袖を掴んで、首を振る。

「嬉しかったよ。全然嫌じゃない。相手が佐々なら・・・むしろ嬉しい・・・」

「自分ではすごく大胆なことを言っただつもりだった。

「そりゃあ・・・俺以外の人とはしないほしいんだけど。ねえ、袖芽」

「名前を呼ばれて、私は顔を上げる。ダイレクトに目が合っ、さすがにどきつとしてしまった。

「下の名前で呼んでみてくんない？」

「意外な質問に私はきよとんとした。いいよと言っから、

「翔太」

新鮮な気がした。佐々木がすごく嬉しそうに「っ」と笑う。それだけで嬉しかった。

無事に修学旅行は終わったが、修学旅行というよりは、ずっと佐々木のことを考えていたような気がした。もうすぐ私たちは3年生になる。

幕間2 小2の涙とひだまり

楽観的な考え方と自己中心的な性格、そして面白いことが大好きなところはとにかく母親と似ていると昔から言われてきた。佐々木翔太は母親似だった。性格を知らなくても、外見だけで父親より母親に似ていることがわかる。佐々木が父親に似ているところと言えば、器用なところだけだと思う。

「翔太は親のいいところだけ受け継いだよな。小夜は学校一美人だったけど、かなりぶきつちよ。反対に俺は外見は悪いが、器用なことは自慢だったからなー」

父である佐々木春明はよくこんなことを言ってきた。顔がどうかはわからないが、確かに何でもできた。

母の名前は佐々木小夜。今の佐々木翔太の原点であると言える人だろう。

今から10年くらい前になる。

佐々木翔太は小学校2年生だった。持ち前の明るさと、なぜだか人を楽しくさせる雰囲気があるのか学校ではいつも周りに友達がいいた。その中でも特に仲が良かったのは、1年生のときからずっと同じクラスの西村和樹と、三枝柚芽さえぐさゆめだった。元々2人は保育園に通っていたときから友達だったらしく、最初に名簿番号順に座ったらたまたま柚芽と隣の席だったことがきっかけで仲良くなった。

「佐々ー！帰ろー！」

「あつ・・・今行くー！」

ちなみに佐々というニックネームの由来は、最初に柚芽と西村に自分の名前を言ったときに、『ささき』を『しゃしゃき』と聞き間違えられたため、訂正して「ささ！」と言ったときから『佐々』と呼ばれるようになったのだ。

小2にしてすでに潰れかけた黒いランドセルをしょって、いつも翔太たちは3人で帰った。

「ねーねー！あそこの電柱まで3人で勝負しようよ！」

柚芽の提案で、翔太たちは一気に駆け出す。提案者の柚芽がフライングで先に飛び出したが、たいていは西村が勝ってしまう。テストではあまり負けことがないのに、翔太は走ることでいつも負ける。

「カズ、すごい」

別にこの頃は柚芽に対して特別な感情は抱いていなかったが、そんなふうにかズを賞賛するのをいつも悔しい思いで見ている。

「おーっ！みんな、おつかえりー！」

そのとき、自転車で坂道をけっこうなスピードで下ってくる人の姿があった。翔太にはすぐに誰だかわかった。

「お母さん！」

買い物帰りらしい母、佐々木小夜だった。

「なにになに？3人で競走？」

「うん！おばさんもする？」

「お姉さんは自転車だから絶対勝っちゃうよ？」

おばさんをお姉さんに変えたのはわざとだろう。翔太は柚芽と西村に手を振った。すでに家の目の前だったのだ。

「じゃーなー！」

「うん。じゃーな」

西村と柚芽が行くのを見送った後、母は自転車をよいしょと停めた。前かごから買い物袋を持ち上げた。

「どう？学校は楽しかった？」

翔太は玄関の扉を開けてあげた。もちろん鍵はいつも持ち歩いている。

「楽しかったよ。聞いてよ！今日給食の時間にタカシが牛乳一気飲みで吹いちゃってビッチョビッチョになっちゃったんだ！」

「えっ、ほんとー！？タカシやつちゃったねー」

「それからカズが……」

思い返せば、母はいつも翔太の話を聞いてくれた。いつだって笑ってくれた。

リビングに行くと、妹たちがテレビを見て騒いでいる。今保育園の年長で、姉が理緒しお、妹が麻衣まいといい、二卵性双生児の双子だった。「お兄ちゃん、おかえりー」

2人の声が重なって聞こえる。妹も母親似だったから、いつも明るくて子供のくせに聞き上手なところがあった。

「いやー……！！！」

変な雄たけびが聞こえてきた。驚いて翔太は声のしたほう、台所へ行ってみると黒いテカテカした、いわゆるゴキブリがかさかさとして動き回っていた。翔太についてきた理緒と麻衣がそれぞれに悲鳴をあげて逃げていく。母が、スリッパを高く掲げた。

「わっ、待って！俺にやらせて」

翔太は慌てて母を止めて、ゴキブリをわしづかみにした。男子でもあまり好かないゴキブリだったが、殺すくらいなら逃がしたほうがいいと思った。そのまま家を出て、近くの公園まで行って放した。帰ってくると、母が玄関先で待っていてくれた。

「翔太、ありがとう」

心底ほっとしたような、安心したようなそんな顔だった。

「翔太はひだまりになれるかもね」

「ひだまり？」

意味がわからなくて聞き返す。

「そう！そこにいるだけで周りの人の心を明るく、あったかくするの。それが、私的なひだまり。翔太にも理緒にも麻衣にもそんな人になってほしいなってお父さんもお母さんも思ってる。翔太はなれるかな？」

それは幼心にすごくかっこいいことのように思えた。翔太は嬉しくなっただけで大きくこくんとうなずいた。

「俺、がんばってひだまりになる！」

母はにっこりと笑って、その温かい手を翔太の頭に寄せた。

「でもね、ひだまりになるだけじゃダメ。翔太にとつてのひだまりも見つけてね。一緒にいるだけであったかくなれる人……お母さんのような！」

「じゃあ、お母さんってよく喋るひだまりだね！」

素直な物言いに、なんだとーと言って母は翔太の首に手をまわしてしめようとする。もちろん力は全然こもっておらず、理緒と麻衣が次は私の番だと言って寄ってたかってくる。

「こらこら順番じゅんばんーん」

母はやっぱひだまりのように笑っていた。

その日の夕食は、家族みんなが大好物のハンバーグだった。それが、家族全員で食べた最後の夕食だった。

翌日の学校の帰り道、翔太はいつものように柚芽と西村と一緒に帰っていた。ちょうどそのとき、大通りに並行する歩道に人だかりができているのを見つけた。

「なんかあつたのかな」

3人は好奇心で見に行ってみた。小さな体で大人の隙間をかいくぐり、先頭まで来た。翔太の目に電柱にぶつかっている車の姿が目に入った。車がぶつかつたんだと頭の中で考えていると、隣にいた西村と柚芽の表情が見えた。2人と、ある一点を見つめて動かなくなっている。

翔太もそちらを見た。

一瞬ですべてのものが目に入ってきた。

朝まで元気になっていた母が血まみれで倒れていた。傍には、ハンドルの曲がった自転車。仰向けで寝ていて、近くにいた何人かの大人に応急処置をされている。

「お母さん!!!」

無意識に叫んでしまった。傍に駆け寄って、何度もその名を叫ぶやがて、ゆっくりと母は目を開けた。

「お母さん……」

母の手がゆっくりと翔太の右頬に触れた。血まみれの冷たい手だった。昨日なでてくれた温かい手ではなかった。

「……ごめん……ね……」

翔太が聞いた母の最期の言葉だった。

葬式が行われていても、翔太はずっとぼんやりとしていた。まだ信じられなかった。あの母のことだ。どこからともなくひよっこりと現れるような気がしていたのだ。

葬式に訪れた人の多くが泣いていた。理緒も麻衣も泣きすぎて涙が枯れていた。翔太は父が涙を流すのを初めて見た。

翔太は泣かなかった。涙を流してしまったら、本当の出来事になってしまふと思ったからだ。

それから、翔太は明るく接してきた。周りに何か言われることが怖かっただけなのかもしれないが、何も考える余裕がないときが一番良かった。

ひだまり、母の残した言葉をそのときは忠実に守っていると思っていた。笑っていないとダメだ。笑っていれば、忘れられる……そう思っていた。

あの日、袖芽の涙を見るまでは。

いつも一緒に帰っていた。それは西村も同じことで、葬式が終わった後も変わらず競走したり、とにかく笑いあった。だけど、突然泣いた。道端で突然涙を流した。

翔太は驚いてしまった。西村は何も言わずにただうつむいていた。

「2人とも……どうしたの？」

「だって……佐々……悲しい、から……」

「

そう言って泣いていた。悲しいから泣いている。ただ純粹な表現だった。

その当時背が同じくらいの西村が翔太の元へ寄ってきて、そしてぎこちない手つきで頭をなでる。温かった。母のように……母はいつだって笑ってくれた。いつだって傍にいてくれた。……今はもういない、ひだまりのような温かい存在。

翔太の頬に大粒の涙がこぼれた。

「お母さん……おかあさん……」

ずっと泣けなかったから、涙がとまらなかった。人前でこんなに泣いたのは初めてだった。

後になって気づいたことだ。あのときは自分のことで精一杯でそんなことを考えていなかった。

翔太にとつてのひだまりを見つけることができた。

父さん、理緒、麻衣。それから……

「佐々！遅刻するよ」

今までと変わらずに差し伸べてくれる温かい手。

「柚芽、カズ……ちよい待ってよー！」

第19章 持つべきものは友達

花見に行こう。

そう決まったのは春休みに入る前、終了式の前日だった。ちょうど4月1日ごろが見頃だと天気予報でやっていたらしい。

「じゃあ、行くメンバー知りたいから黒板に名前書いてねー」

小山ゆりの一声で、何人かの生徒が名前を書きに行く。ちょうど昼ごはんを食べていた私とミッチーと薫かあるも黒板に向かった。

確かに名前を書いておいた。

しかし、翌日の終了式の日、私の名前が消されていた。

「柚芽ゆめ、行かないの？」

ゆりに聞かれて初めて気づいた。私は苦い顔で行くよと答える。

最近、こういう小さな嫌がらせを受けるようになった。修学旅行が終わった頃からだろうか。原因はわからなくもなかったが、そのせいにするつもりはなかった。ミッチーと薫が心配して佐々木にそのことを話すべきだと言ってくれた。しかし、それは余計に嫌われるだけだし、なにより佐々木に迷惑はかけたくなかったのでやめておいた。

そして放課後、私はミッチーと下駄箱へ向かうと、くつ箱の中に明らかにごみと思われるようなものが目立たないように、しかししっかりと詰め込まれていた。さすがに私は心臓が重くなるような感覚を覚えた。

ミッチーが黙って下駄箱にあったごみ箱に捨ててくれた。私は申し訳ない思いでそれを見ていた。

「あつれー、何してんの？」

そのとき現れたのが佐々木と鳩山はとやまだった。私はさすがにびっくりしてしまったが、ミッチーが冷静に対応してくれた。

「なんか変な虫がいてびっくりしちゃったんだよね！」

「……うん、ほんとびっくりしたー」

私もなんとか普通に接することができた。ミッチーのおかげだ。

「じゃあね！バイバーイ！」

ミッチーに合わせてそそくさと私は帰った。

春休みになっても、補講という形で授業は行われた。学校に行くのは気が重かった。また小さな嫌がらせをされているかもしれない。そう思うと憂鬱ゆううつだった。そして、案の定予感よかんは的中した。

「え？教科書ないの？」

隣の席の薫に意外な顔をされる。私は困ったように笑った。

「うん・・・なんか家に持って帰っちゃったみたい」

そうは言ってみたものの、薫にはウソだとすぐにバレてしまったようだ。私は教科書を持ち歩くのが嫌で、いつも学校の机の中に置きっぱなしにしている。テストでもないかぎり、持ち帰らないのだ。それでも、黙って教科書を見せてくれた。

薫もミッチーも、私が誰にも言わないでほしいと言ったから何も言わないでいてくれるのだ。その心遣いがあったかった。

それにしても、こんな小学生のようなイタズラに、私はショックを通り越してだんだんイライラとしてきた。

怒りが爆発したのは、それからすぐのことだ。

私は、突然階段から突き落とされた。何が起こったのかわからなかった。ただ、誰かに押されたということがわかっただけだ。さっきまで私はミッチーと薫と一緒にいたが、ジュースを買いに一人で向かおうとした矢先のことだった。

「柚芽!!!」

近くにいた2人が慌てて駆け寄ってきた。

「大丈夫！？ケガは？」

手のひらとおでこが痛かったが、大きなケガはなかった。

「大丈夫・・・大丈夫なんだけど・・・いい加減キレそう」

私は怒りを精一杯抑え込みながら正直に言った。そのとき、ミッ

チーに肩をぽんと叩かれた。

「よし！その言葉を待っていたぞ、柚芽」

「え・・・？ミッチー？」

「私たちが犯人捕まえてあげる。まあ見てなつて。こう見えても元柔道部黒帯。そこらへんのやわい女になんか負けないよ」

「女・・・？女がやってんのかな？」

「こんな卑怯なこと女々しい女しかやんないでしょ。そいつ佐々木君か西村君のどっちかが好きなんだよ。時期的に、佐々木君と柚芽が付き合ってるって噂聞いて嫉妬しつとしたつてところだね、たぶん」

薫がいつになく不機嫌そうな顔で言つてのけた。

「あんたがこれ以上話したくなさそうだったからあえて何も言わなかったけど、こっちの我慢が限界。そいつ捕まえて根性叩きなおしてやる」

持つべきものは友達だ。この友達2人は今の私以上にキレているので妙に心配だったが、私は2人に感謝していた。

それから、しばらくは何も起こらなかった。

花見当日、クラスのほとんどが川沿いの桜並木に来ていた。この辺りは、出店も出る。

本当に桜が綺麗だった。まだ8分咲きだったが、花見客はとても多い。

私たちは団体だったため、一際盛り上がった。出店で買ったこ焼きなどを食べつつ、ある者はカラオケをしたり、ある者は雑談したりしていた。

私は薫やミッチー、ゆり、歩美、瑠奈るな、涼子と喋っていた。

「柚芽」

後ろから西村に声をかけられた。

「ん、何？」

「さっき橘たちばな見た。夏以来会ってないだろ？」

「えっ！？どこー！」

私は慌てて場所を聞いて追いかけていった。一応メールでは佐々木と付き合い始めたことを言っておいたが、直接ではない。

それから、人ごみを避けてケータイで会話をしている橘の姿を発見した。私が近づくと、ちょうど電話を終えたところだった。

「あ・・・柚芽」

「橘君、久しぶり」

以前とは違う。私はどうしていいかわからなくなった。すると、橘はにっこりと笑った。

「元気にやってるかどうか心配してたんや。会えて良かった」

その言葉に泣きそうになってしまった。私は、橘が本気ではないにしても、ひどいことをした。それなのに彼は優しくかった。

それから、私たちはしばらく談笑した後、お互いに別れた。

多少後ろめたい気持ちがあっただけに、今日会えて良かったとは思った。

「そこまでだよ」

私がクラスメートのところへ戻ろうと橋を渡っているときだった。唐突にそんな言葉が私の背後で聞こえてきた。振り返ると、私のすぐ後ろには見知らぬ女の子、彼女のさらに後ろに薫とミッチーが立っている。

「貴女なんでしょ？今まで柚芽に嫌がらせしてきたのは」

ミッチーの目は据わっていた。そんな表情を見たことがなかったので、私は少し驚いてしまった。

言われた少女は首を振って後ずさった。

「春休み最初の補講日からずっと私たちで見張ってきたら度々貴女を見かけました。1年4組の江崎美穂みほさん。まあ、私たちがいたから次からの補講日は何もなかったんだろうけど、まさかこんな所にまで現れるなんて思わなかったな」

ミッチーの言葉にその少女は何も言えずにいた。セミロングの髪型に眼鏡をかけていて、少し内気な雰囲気かまを醸し出している。

「理由はなんであろうと、これ以上何かするようだったら、私たちも容赦しないから。もう何もしいって約束できるんなら、このことは誰にも言わないであげる。あなたの友達にも家族にも・・・それから佐々木君にも」

薫が淡々と言っただけのける。しかし、江崎という少女はびくつと体が反応した。

私だけが状況を飲み込めずにいた。えーと・・・つまりは・・・

と、そのとき江崎が私のほうを向いた。

「許してください！」

そして、江崎は走って逃げて行ってしまった。

あっという間の出来事に、私はついていけなかった。

後で2人に事情を聞いてみると、こんなカンジだった。

何かをきっかけに佐々木のことを好きになった江崎美穂は噂で私と佐々木が付き合っていることを知った。だけど、私が西村とも仲良くしているから嫉妬したらしい。私にずっと嫌がらせをしてきたのには、そういう経緯があったそう。

桜の下で話す内容ではなかったが、これですばらくは大丈夫だと2人に言われて少し安心した。

「2人ともありがとね。私なんかのためにいろいろ」

「ほんとだよー。あんま心配かけんなって」

持つべきものは友達だ。私は本当に幸せ者だと実感した。最初の補講日からしばらく何も起こらなかったのは、2人のおかげだったんだ。

ちなみに、さつき橋の上から江崎は私を突き落とそうとしていたらしい。橘とも仲良く話してさらに気にくわなくなったのかもしれない。それを聞くと恐ろしくなった。

他のみんなは帰る用意をしていた。

「まあ、心の傷は彼氏に癒してもらえ」

薫の言葉に合わせるように、佐々木が現れた。当然だが、何も知らない顔だ。

「こら、彼氏！しっかり彼女を守ってやんなよ！」

ミッチーがばしんと佐々木の背中を叩く。

「いった！えっ・・・なんの話？」

「じゃーねー」

2人は退散していこうとする。

「佐々つて・・・私の彼氏なんだよね？」

私はにらむように尋ねた。反対にぎよっとした顔をされた。

「えっ・・・そうだと思ってただけど、何・・・どうしたの急に？」

「うっん。それならいいんだ」

私はひよこつと立ち上がった、薫とミッチーを追いかけた。

「佐々！私今日ミッチーと薫と一緒に帰るね！」

私は2人の親友の元へ走っていった。

第20章 永遠じゃない

その日はインターハイ出場を決めた西村の祝賀会だった。と言っても、部活内でもクラスでも散々行われ、今やっているのは私と佐々木、薫、ミッチー、鳩山の6人だけである。

「カンパニー!!!」

これも散々行われてきた。私たちは佐々木の家にあった炭酸で乾杯する。

「ありがと！みんなのおかげです！」

西村はぺこぺことお辞儀をしてグラスを全部飲み干す。

100メートル走での決勝戦、ほとんど横並び状態だったが、それでも橋に続く第2位でゴールした。ケガをしてからの自己最高記録だったらしい。

「俺がここまでやってこれたのは、ほんとみんなのおかげだよ。ありがとう」

「そーだよなー！俺たちに感謝しろよなー！」

鳩山が調子の良いことを言う。みんな笑った。

「まあ、これは俺の戦利品。おいしいぜ」

と言って、シャンパンのようなものを取り出した。それがお酒だということは何となくわかったが、誰もコメントしなかった。

しばらく食べたり飲んだりを繰り返しているうちにミッチーが、

「ねえ、アルバム見せてほしいな」

「いいよ。ちょっと待ってて」

西村がうなずいて本棚を探す。しばらくして赤い表紙の本を取り出した。

ミッチーがそれを開いた。

「それは中学のときの。こっちが小学校」

「へー……やっぱ3人とも昔から仲良かったんだね」

それはミッチーの率直な感想だった。確かに、写っている写真はどれも集団で写っているものだったが、とにかく3人が多かった。

「いいなーこういうの。幼なじみってカンジ」

「でも俺は小1のときに初めて友達になったんだ。幼なじみってほどじゃないかも」

「そう寂しいこと言うなって」

そう言っつて西村が佐々木の頭をなでる。むーっとうなった。

「あれ？この人って真希じゃない？」

ミッチーが写真の一部を指差す。それは小学校の卒業写真だった。ほんとだ、と薫もうなずく。

「一緒の学校だったんだ。ねえ？カズ」

私は意味ありげな視線を送る。西村が微妙な顔をした。

「えっ！？そういうことなの？」

ミッチーが嬉しそうに反応する。私はため息をもらした。

「付き合っっちゃえばいいのに・・・なんで告げないんかな」

「佐々と一緒に勇気がないのかも」

あっさりと答える西村を佐々木がにらみつける。

「柚芽！」

そう西村に呼ばれて私は傍に寄っていく。すると、西村に頭を抱きしめられた。さすがにどきっとしてしまったが、すぐに佐々木の蹴りがぶっ飛んできた。

「あのときの決着つけよーじゃんかよ」

よく見ると、佐々木は酔っていた。鳩山は自分があげた酒の口が開いていることによくやく気づいた。そうして、あのときとやらの決着としてプロレスごっこが始まった。

「大丈夫だつて。あんま酔ってないよ」

と言いつつも、足取りはおぼつかなかった。私と西村ははなんとか2階の佐々木の部屋まで運んでいく。鳩山の話によると、ビンの半分を1人で飲んだらしかった。酒乱になっているわけではなく、

ぼーっして危なっかしい状態なのである。

1階ではすでに片づけをし始めている。

「お酒弱かったんだな」

西村が意外そうに尋ねる。

「なんつーか・・・40度の熱出したときみたいな気分・・・」

それはなかなか重症ではないだろうか。

「柚芽、いい匂いがする。ちゃんとシャンプーしてんだね」

「当たり前でしょ!!」

どこまで酔っているのだろうか。

「さんきゅ。ここまでで大丈夫だよ。ちょっと寝れば醒めると思う」
部屋の入り口まで連れてきたところだった。

なんとなく離れがたかった。私は戸惑いながらも佐々木から手を放した。

「なんだよ。俺と一緒にいたいのかよ」

佐々木にとっては冗談のつもりで言ったのかもしれない。しかし、
凶星だったため私はぎくつと反応してしまった。西村が笑う。

「俺も・・・みんなとずっと高校生でいたい。柚芽とずっと一緒に
いたいよ・・・でも、みんなバラバラになっちゃうんだな」

それはこれからの未来のことだった。私はうんとうなずいた。同
じ気持ちだった。

月日は流れていくんだ。

それでも前を向いていなくちゃいけない。どんなことがあっても。
振り返っても、また前を向かなければならない。

出会いもあれば別れもある・・・でも決して永遠じゃないと私た
ちは信じている。

「まあ腐った縁同士、またどこかでばったり会っちゃいそうだよね」
私の冗談とも本気ともつかない言葉に西村も佐々木も笑い出した。
そんな腐った縁も悪くないと、このとき私たちは考えていた。

(おわり)

第20章 永遠じゃない（後書き）

今まで呼んでくださってありがとうございました。

これにてトライアングルを終了させていただきました。

また機会があったら彼らのその後も書いてみたいと思います。（機

会があったらですけど・・・）

本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7705d/>

トライアングル

2010年10月8日15時07分発行